國學院大學学術情報リポジトリ

# Preliminary report of Ishikuratai site



| メタデータ | 言語: jpn<br>出版者:<br>公開日: 2023-02-09<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者:<br>國學院大學研究開発推進機構伝統文化リサーチセンター「祭祀遺跡に見るモノと心」プロジェクト<br>メールアドレス:<br>所属: |
| --- | --- |
| URL | https://doi.org/10.57529/00002010 |

國學院大學伝統文化リサーチセンター考古学調査報告

# 秋田県北秋田市
# 石倉岱遺跡の調査概報

2011

國學院大學研究開発推進機構伝統文化リサーチセンター
「祭祀遺跡に見るモノと心」プロジェクト

## 例　言

1．本書は、平成22（2010）年度に國學院大學研究開発推進機構伝統文化リサーチセンター「祭祀遺跡に見るモノと心」プロジェクト（グループ代表：吉田恵二）が実施した、秋田県北秋田市七日市字石倉岱に所在する石倉岱遺跡の調査概報である。

2．本調査は、石倉岱遺跡に関する基礎的情報の整理と研究、および公開・活用を目的として、平成22（2010）年11月２日から同月６日まで実施した。

3．本調査は、北秋田市教育委員会（担当：榎本剛治）と共同で行なわれ、加藤里美（当センター講師）、中村耕作（当センター助手）、阿部昭典（当センター客員研究員）、加藤元康（当センターＰＤ研究員）、朝倉一貴（当センター作業協力者・本学大学院生）が担当し、新原佑典（当センターＰＤ研究員）、平野哲也（当センター作業協力者・本学大学院生）、高橋智也（本学大学院生）、佐藤直紀（本学大学院生）が参加した。また、有志として宮尾亨（当センター共同研究員）、中島将太（杉並区教育委員会）の協力があり、小林達雄（当センター客員教授）の指導を受けた。

4．本書の執筆者については、それぞれ担当箇所の末尾に文責を示した。

5．図表・写真図版の作製は、阿部昭典・加藤元康・朝倉一貴が担当した。

6．本調査に当たっては、冨樫泰時、三澤仁（北秋田市教育委員会）、斎藤彦志（北秋田市教育委員会）、館山操（北秋田市教育委員会）、細田昌史（北秋田市教育委員会）、高橋忠彦（秋田県教育庁）、長岐直介、畠山洋子、佐藤健一、佐藤勘重をはじめとする現地の方々より、多大な御厚意を賜った（順不同）。ここに記して、深甚なる謝意を表すると共に、記載漏れの方々には御海容を乞う次第である。

7．整理作業に際しては、杉山林継（当センター長）、谷口康浩（当センター准教授）、内川隆志（当センター准教授）、中村大（(共)総合地球環境学研究所プロジェクト研究員・当センター共同研究員）、伊藤慎二（本学博物館学教育研究情報センター助教）、菊地大樹の御協力を得た（順不同）。ここに記して、篤い御厚意に感謝申し上げたい。

8．本書は、加藤元康・阿部昭典が編集した。

## 目　次

例　言
第１章　遺跡の概要…… 91
第２章　調査…… 94
第３章　調査成果…… 96
　第１節　遺跡と過去のトレンチ位置…… 96
　第２節　ハンドボーリング探査…… 98
　第３節　試掘…… 100
　第４節　出土・表面採集・佐藤家所蔵資料…… 103
第４章　小結…… 114
記念講演「日本列島における石信仰」……杉山林継 115

## 挿図目次

第１図　1958（昭和33）年調査時の遺構配置図と写真…… 92
第２図　周辺の主な遺跡…… 93
第３図　石倉岱遺跡調査地点と調査区・試掘配置図…… 95
第４図　空中写真と1958年のトレンチ想定図…… 97
第５図　測量数値を活用した三次元動画…… 98
第６図　調査区全体及び各調査区の平面と垂直分布…… 99
第７図　TP１・TP３…… 101
第８図　TP２及び出土遺物…… 102
第９図　出土土器及び表採資料…… 105
第10図　表採土器資料（１）…… 106
第11図　表採土器資料（２）…… 107
第12図　出土及び表採石器・石製品…… 108
第13図　佐藤家所蔵石器・石製品資料…… 109
第14図　佐藤家所蔵石製品資料…… 110

## 表 目 次

第１表　土器観察表（１）…… 111
第２表　土器観察表（２）…… 112
第３表　土器観察表（３）…… 113
第４表　石器・石製品観察表…… 113

## 写真図版

図版１　調査地近景・調査区４・ボーリング探査…… 121
図版２　TP２配石確認状況・TP２遺物出土状況・TP２ピット確認状況…… 122
図版３　TP１・３確認状況・TP３確認状況・TP１完掘状況…… 123
図版４　試掘出土縄文土器・2010年表採縄文土器…… 124
図版５　2010年表採及び佐藤家所蔵土器・TP１・TP２・TP３出土土器…… 125
図版６　1958年出土石器・石製品・TP２出土石器・2009年表採石器…… 126
図版７　佐藤家所蔵石器・石製品・2010年表採石器・石製品…… 127
図版８　2010年表採石器・2010年表採石材…… 128

# 第１章　遺跡の概要

## 調査の経緯

日本列島の豊かな自然が織りなす四季折々の風景は、環境のみならず、人々の生活の背景に様々な影響を与え日本の伝統文化に組み込まれている。環境と人との関係を示す景観の中でも遺跡との関係は戦前の大場磐雄が、静岡県下田市洗田遺跡と三倉山との関係に着目して以来、近年の縄文時代の遺跡と景観から縄文文化の世界観を指摘した縄文ランドスケープまで、研究活動がなされており、國學院大學の学統として位置づけられる。

今なお豊かな自然が残る東北地方北部は、中央に奥羽山脈が横たわり、日本海側に白神山地などの天然ブナ林が残っている。この地では縄文人の精神世界の代表的設計である環状列石が、縄文時代後期に展開し、縄文ランドスケープ研究が行なわれた。その他、それに関係する様々な道具の多様化・多量化が認められる。このような事から文部科学省オープン・リサーチ・センター整備事業「モノと心に学ぶ伝統の知恵と実践」を推進する伝統文化リサーチセンターでは「祭祀遺跡に見るモノと心」において、東北地方北部の縄文時代を中心とする調査を行なっている。この調査は、縄文時代の第二の道具の資料の実見・観察、環状列石や関連遺跡の踏査など景観分析に必要な基礎情報の収集などを目的に、2007（平成19）年８月27日～９月３日、2008（平成20）年８月25日～30日、同年12月４日～６日、2009（平成21）年５月15日・16日、同年８月25日～31日に行なわれている。

これらの調査成果を平成21年度春季企画展「祭祀遺跡・神社祭礼・國學院の学術資産」の「北東北のマツリと景観」（６月１日～７月25日開催）で展示し、フォーラム「環状列石をめぐるマツリと景観」（６月20日・21日開催）などで、地域の研究者の発表を含めて討論した。さらに、英国セインズベリー日本藝術研究所の協力を得て開催されたワークショップ「The archaeology of Jomon ritual and religion」（11月６日開催）でもそれらの成果を含めた発表を行なっている。

そのような調査研究活動の中で、北秋田市の遺跡および出土資料の調査で訪問し、世界遺産に推進している伊勢堂岱遺跡と関連する遺跡として石倉岱遺跡を平成21年に踏査し、現況を確認した。その後、本遺跡についての情報を整理する中で、本センターの研究成果を検証することのできる遺跡として、その重要性を認識し、さらに研究公開を充実させるべく、2010（平成22）年７月１日に國學院大學研究開発推進機構と北秋田市教育委員会とにおいて、石倉岱遺跡を中心にした研究協力に関する協定を締結した。同年７月15日に、その締結記念講演として北秋田市中央公民館にて杉山林継センター長による「日本列島における石信仰」が開催され、同年11月１日～同月７日（現地調査11月２日～同月６日）に同市石倉岱遺跡の調査が行なわれた。本概報は研究協力に基づく記念講演と石倉岱遺跡の調査に関して記すものである。

## 地理的・歴史的環境と過去の調査

秋田県北部を流れる米代川は、奥羽山脈の中岳から流れる大河である。北秋田市は米代川の中流域に位置し、東は大館市と鹿角市、西は能代市に囲まれている。

本遺跡は米代川の支流である小猿部川の右岸の河岸段丘上の秋田県北秋田市七日市字石倉岱に所在する。小猿部川右岸の段丘上には根木屋岱Ⅱ遺跡・伊勢堂岱遺跡・囲の内遺跡・山の上遺跡などの縄文時代の遺跡が知られている（第２図）。小猿部川に合流する小森川の右岸には藤株遺跡があり、小猿部川と米代川の合流地点の近傍には伊勢堂岱遺跡が所在している。

石倉岱遺跡の調査は1958（昭和33）年に大和久震平氏を中心に秋田県立鷹巣農林高校と桂高校の生徒が調査し、環状列石の遺跡として報告がなされた（大和久1958・大和久1962）。その後、石倉岱遺跡の記載はないが、『秋田県史』では石倉岱遺跡と全く同じ内容を示す囲の内遺跡の様々な記述がある（秋田県1960）。それ以降は、囲の内遺跡として、記載・報告されている。石倉岱遺跡の周辺の字名は北側から西側に「山ノ上」、さらに西側に「囲ノ内」、北側から東側に「根木屋敷岱」となっており、何らかの理由で遺跡名称の混同があったと思われる。

当時の調査は、10月26日・27日の両日に行なわれた。調査当初は堀之内並行の土器編年を目的に調査が行なわれたのであるが、トレンチ１での土層の攪乱がひどく、遺物の出土量が少ないことからトレンチ２を設定し、配

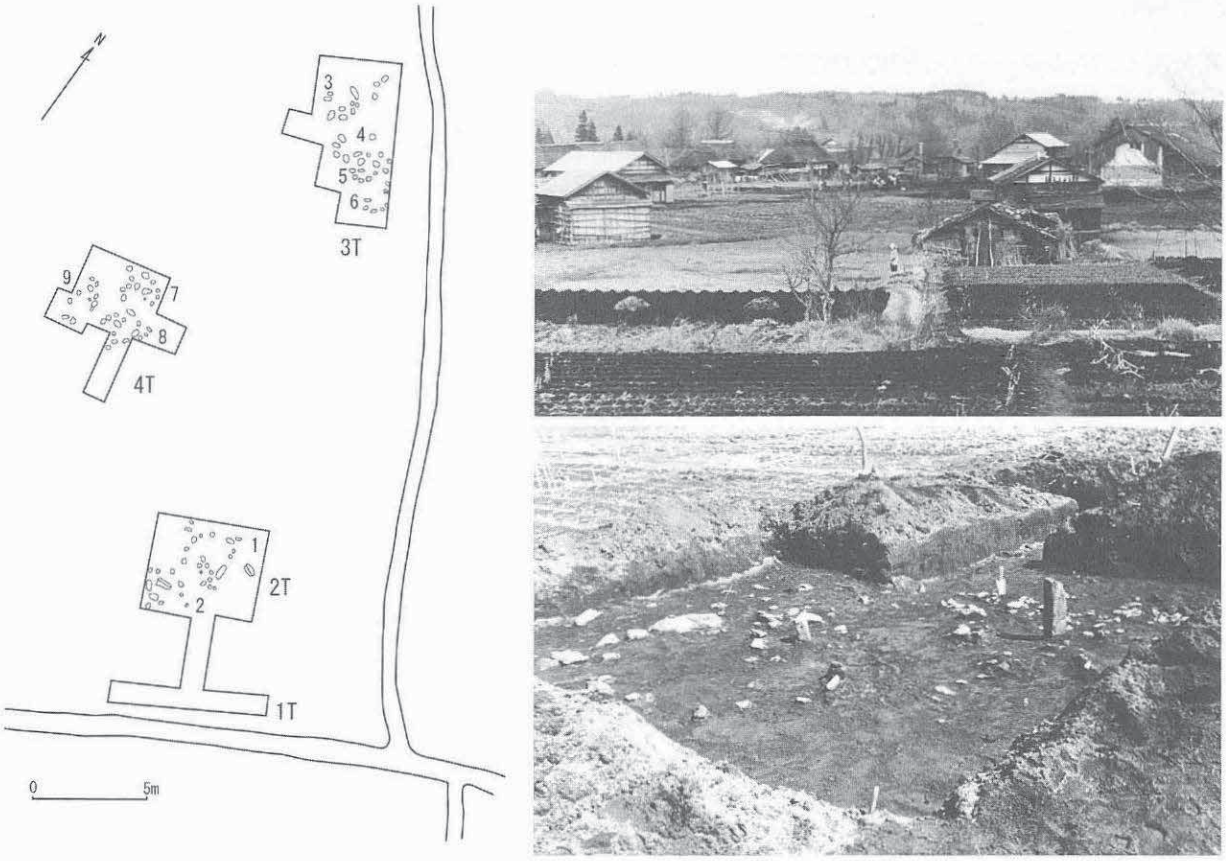
石が検出された。さらに、北側にトレンチ３、その中央の西側にトレンチ４が設定されている。そのうち、トレンチ２には第１・２サークル、トレンチ３には第３～６サークル、トレンチ４に第７～９サークルと計９基の環状配石が検出されている（第１図）。

第１サークルはほぼ円形（長軸1.1m×短軸0.4m）で、構成する石の１つは直立状態で検出され、外側からは円形土製品や三脚石器、打製石斧が出土した。第２サークル（長軸1m×短軸0.9m）はほぼ円形で、中央付近には柱状節理の石が横たわる。第３・４・５サークルは0.5mと小形のもので、構成する石は川原石、第４サークルの外側から三脚石器、第５サークルにはややまとまって土器が出土している。第７・８・９サークルは攪乱がひどく、第９サークルのみ形態がわかり、三脚石器と磨製石斧が出土している。第８サークルは大形の石が配置され、最大40cm×35cmの板状の石が検出されている。この他、現在の十腰内式と思われる土器片やミニチュア土器などが出土している。土器は復元できる個体はなく、破片資料であるとされている。

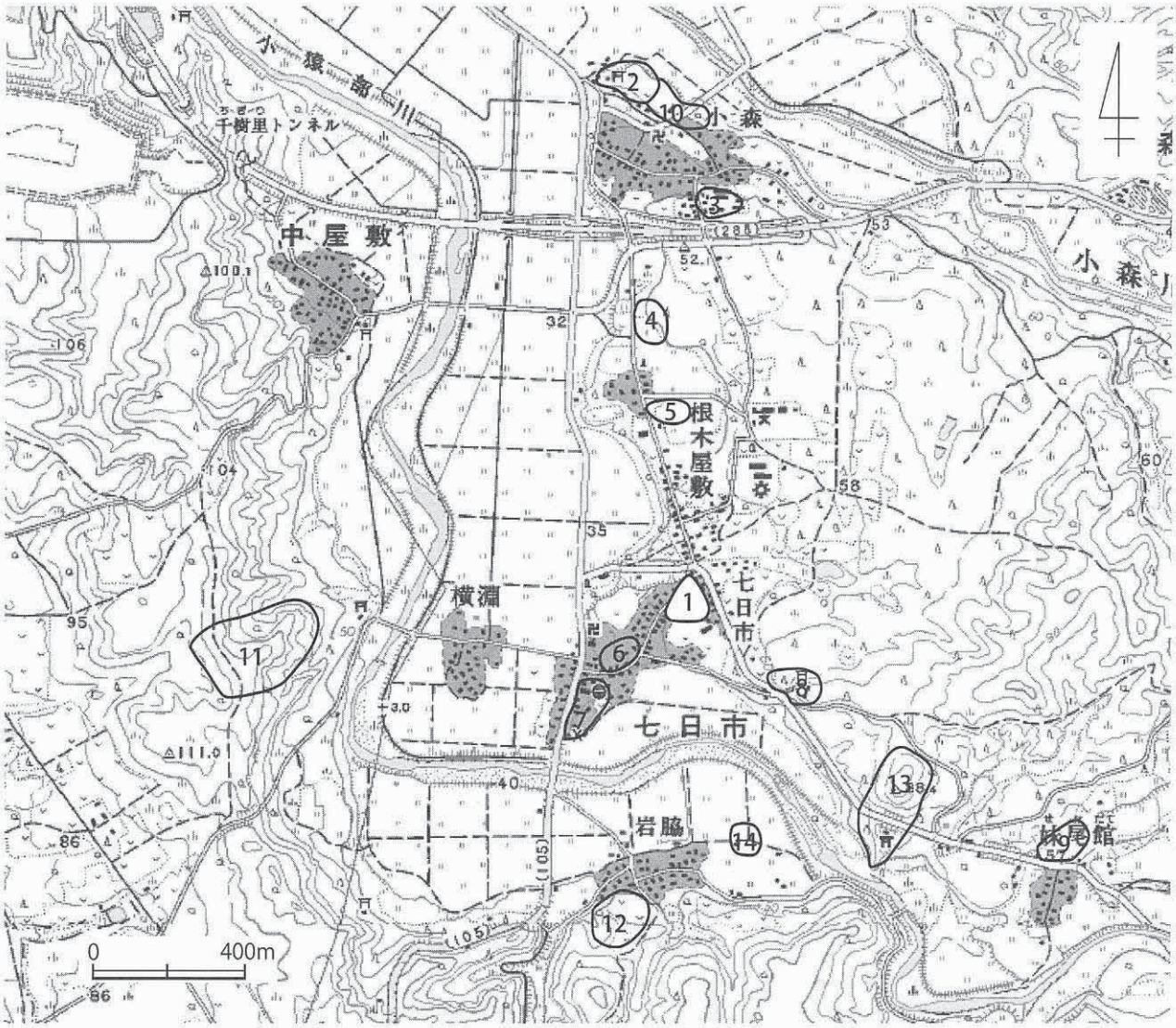
この調査の出土資料を捜索し、その一部は秋田県立鷹巣農林高校の農林博物館に収蔵されていることを確認した。現在は北秋田市教育委員会に移管されている。秋田県立鷹巣農林高校付属農林博物館は1954（昭和29）年10月に創立40周年記念として落成し、1956（昭和31）年10月に博物館法により相当施設として指定を受けている。秋田県内で最も古い博物館であった（冨樫2003）。その２年後の1958（昭和33）年に本遺跡の調査が行なわれ、農林博物館で出土資料を保管していた（秋田県1960）。

その後、1984（昭和59）年に畠山益穂氏が自宅の庭先で検出された配石を使用して復元作業を行なっている。これは町主体の観光パンフレットの撮影用に再現されたもので、撮影後、埋め戻されている（畠山1998）。

調査が行なわれてから52年が経過したが、遺跡周辺の住民はその存在を周知しており、木製の看板もあったという。今回の調査では遺跡の全容解明に向けて、過去の調査地点や現在の遺跡の状況などを聞き取りやハンドボーリング探査、表面採集、試掘などによって基礎的なデータを収集することを目的に行なった。　（加藤元康）




第１図　1958（昭和33）年調査時の遺構配置図と写真（大和久1958）




| | 遺跡名 | 所在地 | 種別 | 遺構・遺物 |
|---|---|---|---|---|
| 1 | 石倉岱 | 七日市字石倉岱3-1 | 祭祀遺跡 | 縄文土器（後期、十腰内式）、環状配石遺構、平安時代 |
| 2 | タモノ木 | 小森字タモノ木17 | 遺物包含地 | 縄文土器（中期、大木９・10式） |
| 3 | 小森 | 小森字小森88-1 | 遺物包含地 | 縄文土器（晩期、大洞ＢＣ式） |
| 4 | 根木屋敷岱Ⅰ | 七日市字根木屋敷岱20 | 遺物包含地 | 土師器 |
| 5 | 根木屋敷岱Ⅱ | 七日市字根木屋敷岱61 | 遺物包含地 | 縄文土器（後期・晩期） |
| 6 | 山の上 | 七日市字山の上57 | 遺物包含地 | 縄文土器（中期、大木９・10式） |
| 7 | 囲の内 | 七日市字囲の内80 | 遺物包含地 | |
| 8 | 伊勢堂岱 | 七日市字伊勢堂岱8-4 | 遺物包含地 | 縄文土器（前期・中期）、石棒 |
| 9 | 野尻 | 七日市字野尻8-2 | 遺物包含地 | 縄文土器（後期） |
| 10 | 小森館 | 小森字小森 | 館跡 | |
| 11 | 横淵館 | 七日市字古館 | 館跡 | 郭 |
| 12 | 岩脇館 | 七日市字岩脇坂の上 | 館跡 | 郭 |
| 13 | 妹尾館 | 七日市字長根沢 | 館跡 | 郭 |
| 14 | 水門下タ | 七日市字水門下タ | 遺物包含地 | 陶磁 |

※秋田県遺跡地図を基に、一部改変。

**第２図　周辺の主な遺跡**

# 第２章　調査

## 第１節　調査の経過

**11月１日(月)**　午前９時、大学より北秋田市へ向け出発。午後６時頃に北秋田市教育委員会の榎本剛治氏に挨拶。

**11月２日(火)**　午前８時30分、北秋田市中央公民館にて同市教育委員会に挨拶。午前９時に調査機材を七日市基幹集落センターに置き、地権者・関係者に挨拶を行なう。その際、佐藤健一氏所蔵の資料を借用する。天候不順のため、基幹集落センターにて資料の実測を開始する。雨が小康状態になったため、遺跡の踏査を行ない、遺物の散布状況を考慮しつつ遺物を表採する。降雨により、センターにて、実測を再開する。

**11月３日(水)**　午前中から降雪・雷雨のため、現場作業を断念し、前日の実測作業の継続と表採資料の洗い作業を行なう。また測量作業の情報確認を行なった。

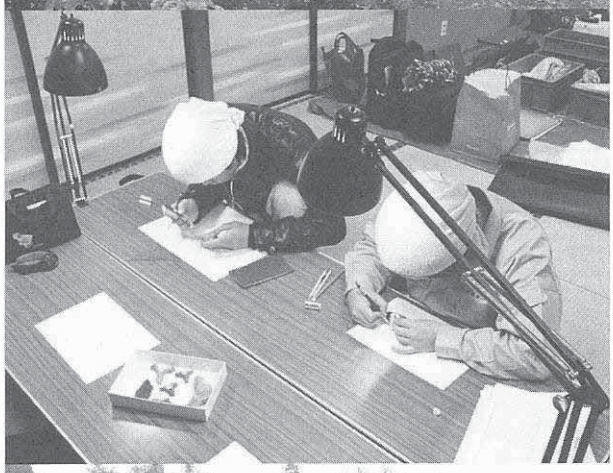
**11月４日(木)**　現場作業を開始する。農作物を避けて、４つの調査区を設定し、ハンドボーリング探査を行なう。探査の結果を測量し、良好な箇所に２つのテストピット（以下、TP）のTP１とTP２を設定し、掘り下げ作業を開始する。

**11月５日(金)**　地権者のご厚意により、調査区４を拡張し、ハンドボーリング探査を行ない、測量を継続する。またTP１の隣に、TP３を設定し、掘り下げ作業を行なう。配石状況を確認し、随時、平面図を作成する。TP１とTP２に配石下の堆積状況の確認するための範囲を設定する。

**11月６日(土)**　前日の作業を継続する。地山と判断される深さまで掘り下げ、土層堆積状況を確認する。調査区・TPの測量を継続する。各TPの平面図を作成し、写真撮影などを行ない、すべての確認作業を終了後、埋め戻す。

**11月７日(日)**　地権者・調査協力者宅を訪問し、挨拶を行なう。その際、畠山氏の宅地の一角から検出された配石の写真を借用する。関連遺跡を踏査し、北秋田市より大学へ向け出発する。

（加藤元康）



## 第２節　調査の方法

石倉岱遺跡の調査において行なった調査区・試掘坑設定、測量ならびに写真撮影などについて述べる。これらの作業に際して使用した主要な機材は、トータルステーションGPT-3005W（TOPCON）、データコレクタFC-2000（TOPCON）、一眼レフデジタルカメラD200（ニコン）、各種分布図の作成にあたっては、遺構実測支援システムT3Di（PASCO）を使用した。

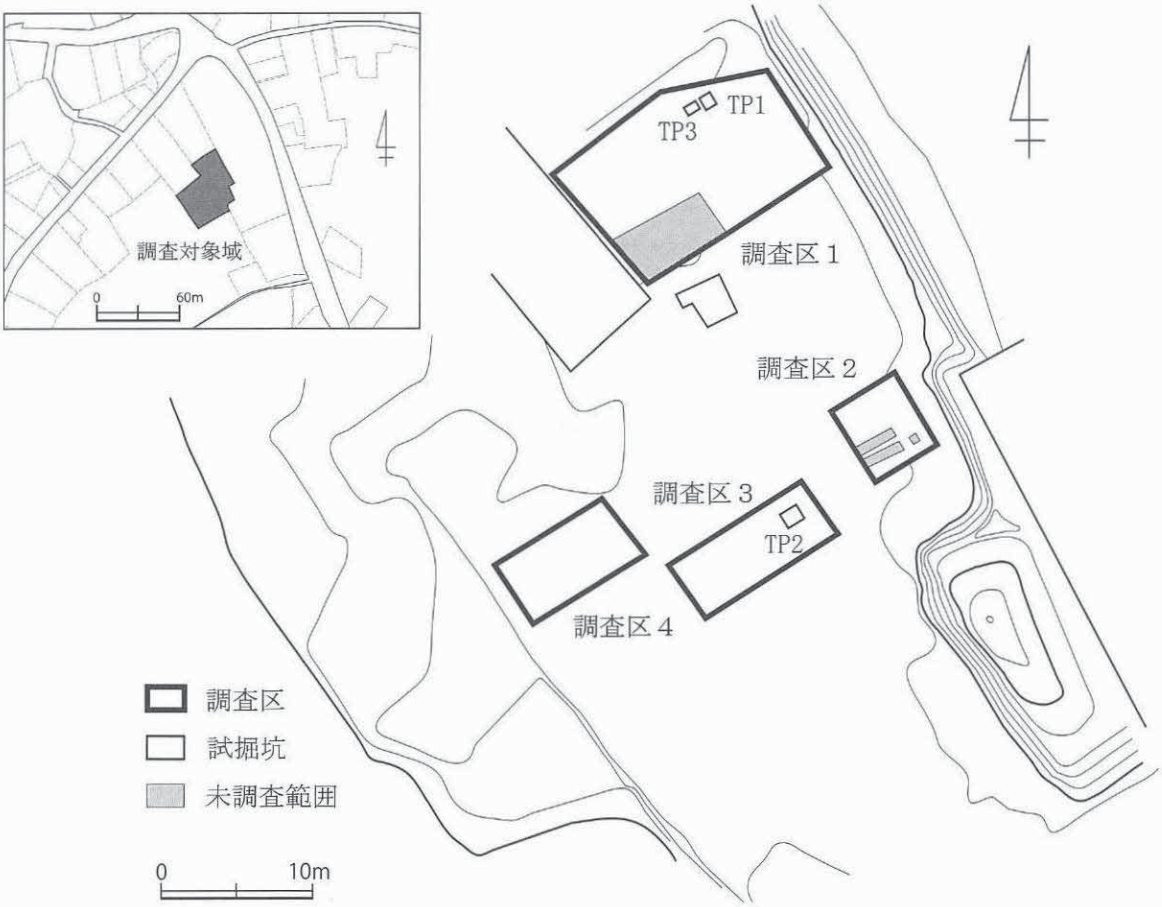
今回の調査は秋田県北秋田市七日市石倉岱３－５・５及び３－３の一部の約1013㎡を対象に行なっている。現状は耕作地であり、農作物を避けて調査区１・２・３・４を設定し、ハンドボーリング探査・試掘調査を行なった。調査区内においても攪乱と農作物の関係で調査不可能の箇所を未調査範囲とした。表面採集は調査対象域外も行なっている。ハンドボーリング探査の結果を順次測量し、分布を確認した。その結果を参考に、TP１・２の試掘坑を、さらにTP１の西側にTP３を設定し、地表下の配石状況ならびに土層の堆積状況の確認作業を行なった（第３図）。

測量の基準点は調査地内に任意に設置し、標高は国土地理院電子基準点（点番号020922、所在地：北秋田市七日市字中岱31番）から水準測量し、算出した。測量の基準点の座標値はIK0（0,0,56293）、IK1（49.5,0,55763）、IK2（7.65,-6.41,56.123）である。調査終了後、試掘坑を埋め戻し、IK2以外の杭は撤去した。

地形測量では、傾斜変換点を推定してトータルステーションで座標値・標高値の観測を行い、ArcGIS（Ver9.3）3D Analystで等高線を作成した。なお、調査の関係上、各試掘坑の平面図作成にあたっては、試掘坑に任意に設定された点をトータルステーションで測定し、後日、合成作業を行なった。

基礎的な整理作業は宿舎で随時行ない、現地調査終了後は國學院大學伝統文化リサーチセンターの研究本部および資料収集調査室（２）において作業を行なった。整理作業の主な内容は、遺物の整理と分類、実測図作成、拓本採取、写真撮影、地形測量図・各種分布図の作成作業等である。

（加藤元康・朝倉一貴）




第３図　石倉岱遺跡調査地点と調査区・試掘配置図

# 第３章　調査成果

今回の調査では、石倉岱遺跡の基礎情報を収集し、整理するために、聞き取り調査、ハンドボーリング探査、試掘、出土資料の記録化などの調査を行なっている。これらの調査は遺跡の位置および過去の調査の際に設定されたトレンチの確定、配石状況の確認、出土遺物の検証などを目的にしている。以下では、これらの目的に関する成果を調査内容ごとに報告する。また石倉岱遺跡の資料は過去の調査の出土資料、地権者所蔵資料、表採資料、試掘出土資料がある。これらの内、過去の調査の資料の一部は秋田県立鷹巣農林高校の農林博物館にて確認できたが、それ以外の資料については、現在、調査中である。各節で述べる成果については今後さらに検討し、報告する予定である。

（加藤元康）

## 第１節　遺跡と過去のトレンチの位置

本遺跡は第１章で述べたように、現在は囲の内遺跡として周知されてきた。この点に留意して関係資料の収集と調査を行なってきたが、遺跡の場所は調査前の段階でほぼ確定することができた。しかし、トレンチの配置については、第１図に記載されている道の位置を特定できず、周辺住民の聞き取り調査や過去の調査の写真などから現地で確認した。その後、国土地理院の『国土変遷アーカイブス』を利用し、1947年と1975年の遺跡周辺の写真と聞き取り調査の結果を総合して検証作業を行なった。

### 聞き取り調査

地権者及び周辺住民を対象に聞き取り調査を行ない、長岐直介氏には1958年の調査報告書の写真を確認して頂いた。それらの内容を要約すると以下になる。

（１）過去のトレンチは、佐藤氏の畑の中にある。

（２）佐藤氏の畑の一角から口縁部のみ欠けたほぼ完形の壺形土器が出土している。

（３）畑の隅に遺跡の案内板があったが、木製だったために腐って、失われた。

（４）石が多く取れることから、字名が石倉岱である。

（５）調査を行なった南側の隣接する畑から大きな石は出ない。

（６）子供の頃に、土の中に焼土の跡があり、昔の人が火を焚いた跡だと親が教えてくれた。

この他に過去の調査の写真を確認して頂いた長岐氏には、家名・建物名を書き入れて頂いている。第１図の調査地遠景の写真の右側には七日市農協が写っており、この建物は現在でも残っている。この写真と調査風景との関係や上記（１）の内容から過去のトレンチ設定箇所は佐藤氏の畑であることが想定された。

この他に遺跡に関する興味深い内容もあり、上記（２）や（５）は遺跡の状況を（６）は遺跡の性格に関して、（４）は土地名と遺跡との関係を示しているように推断できる。

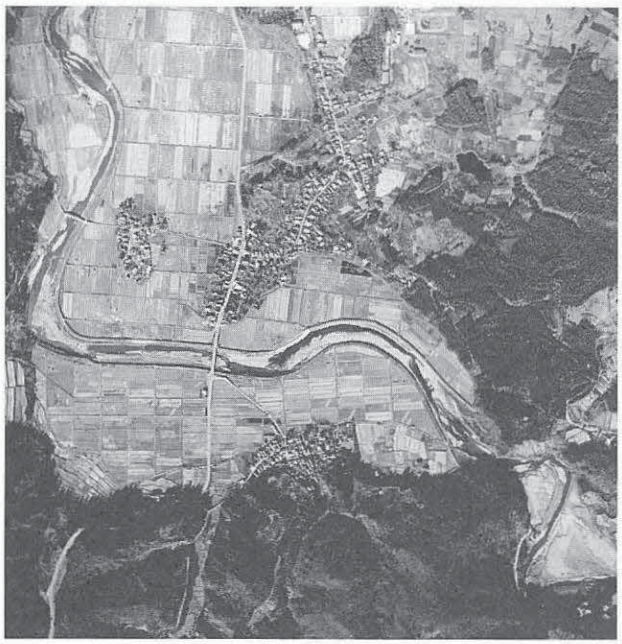
### トレンチの位置

この聞き取り調査の結果を空中写真を使用して、位置の特定作業を行なった。使用した写真は国土地理院発行の1947年（空中写真整理番号Ｕ656コース番号Ａ写真番号100）と1975年（写真整理番号CTO-75-22コース番号15B写真番号16）を使用し、その他の地図も参照している（第４図）。

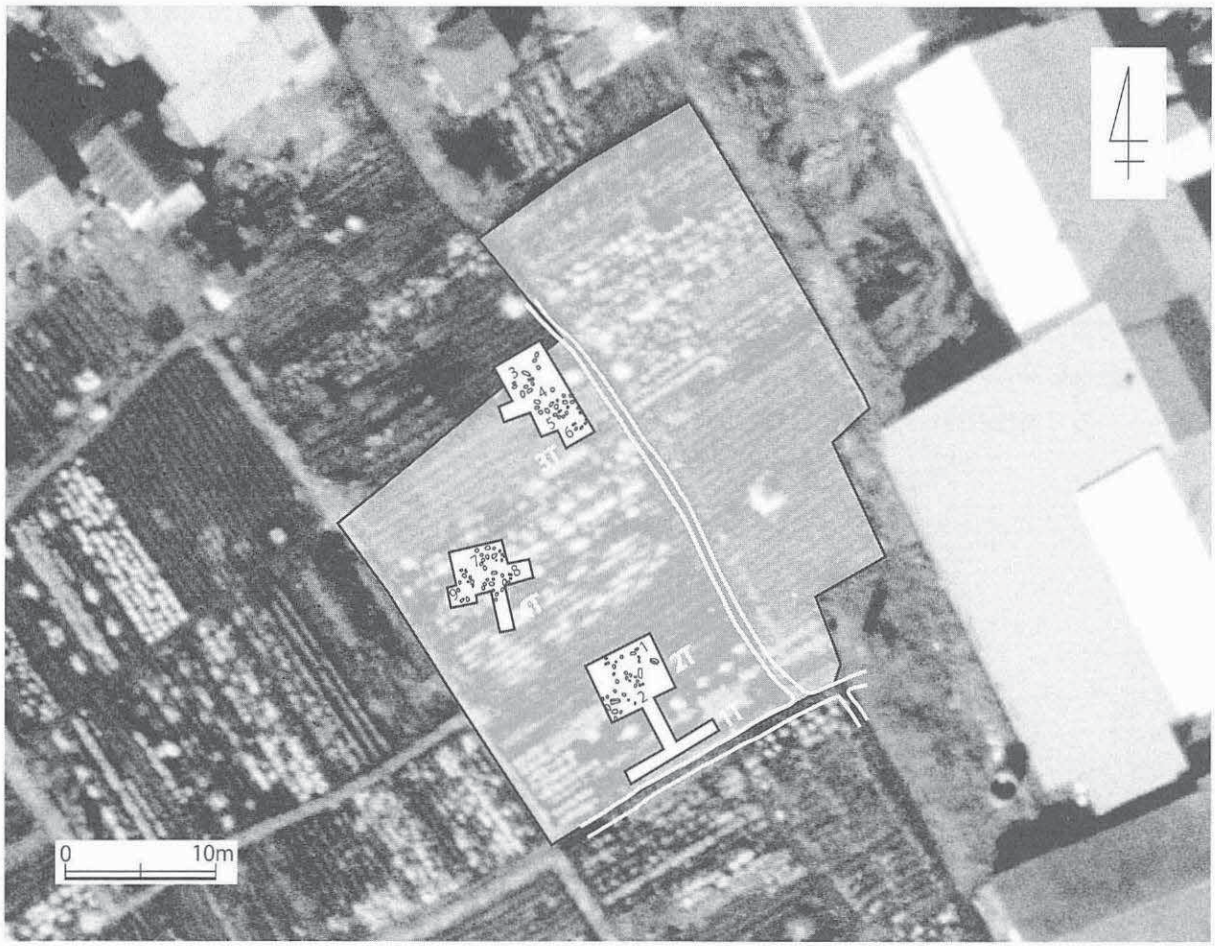
その結果、過去のトレンチ配置図で示されている方位と縮尺を、地図を補助にした空中写真と合わせて合成したところ、道路は畑の畔道を描き、場所はほぼ佐藤氏の畑の中に入ることが判明した。これはほぼ聞き取り調査と一致する結果となっている。後に述べる今回の調査区との関係は調査区３の南隅にトレンチ２、調査区４の一部にトレンチ４があったと想定でき、トレンチ３は現在の作業小屋の付近になると思われる。

（加藤元康）

空中写真（1947年：国土地理院）



空中写真（1975年：国土地理院）




過去のトレンチの想定図

第４図　空中写真と1958年のトレンチ想定図

## 第２節　ハンドボーリング探査

ハンドボーリング探査は、榎本剛治氏の指導の下、伊勢堂岱遺跡のハンドボーリング探査の方法・結果を参考に行なった。探査は作業者が横一列に並び、約10㎝間隔でスティックを土壌に刺して行ない、表土下の配石の確認するものである。反応があった地点は、その周辺を集中的に確認作業を行なっている。なお、調査区の設定については第２章第２節で述べている。

反応があった地点には、各作業者が目印を置き、その地点をトータルステーションで観測した。観測は、ピンポールプリズムをボーリングステッキで反応があった深度まで再度深く入れ、記録を行なった。その結果を、GISソフトを用いて、三次元データを動画化し、遺構実測支援システムT3Di（PASCO）を使用して、分布図を作成した。

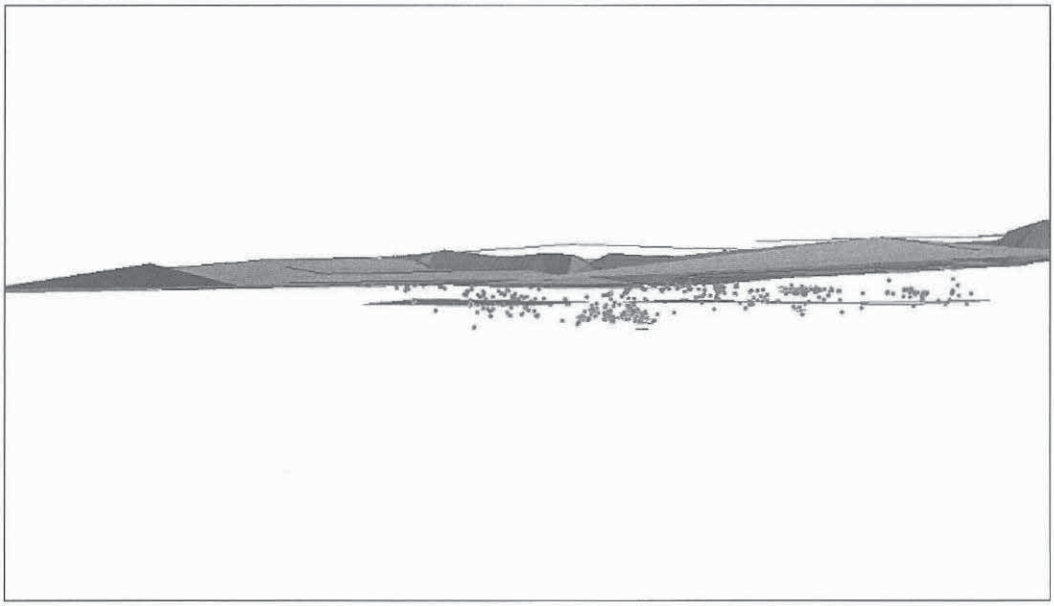
### 三次元動画化（第５図）

ハンドボーリング探査の測量数値を基にGISソフトを用いた三次元の視覚化を行なった。これは調査区全域で行なうことにより、地表下の配石状況を可視化し、確認することができ、環状列石となるのかという検討材料とするための試みであったが、実際には調査区１～４が設定され、調査区内の探査が行なわれた。それらの測量数値を主に三次元化し、動画を制作した。調査区内の礫と思われる反応点の位置と深度を様々な視点で見ることが可能となり、展示などの一般的な成果公開においても測量結果の活用を行なうことができるであろう。

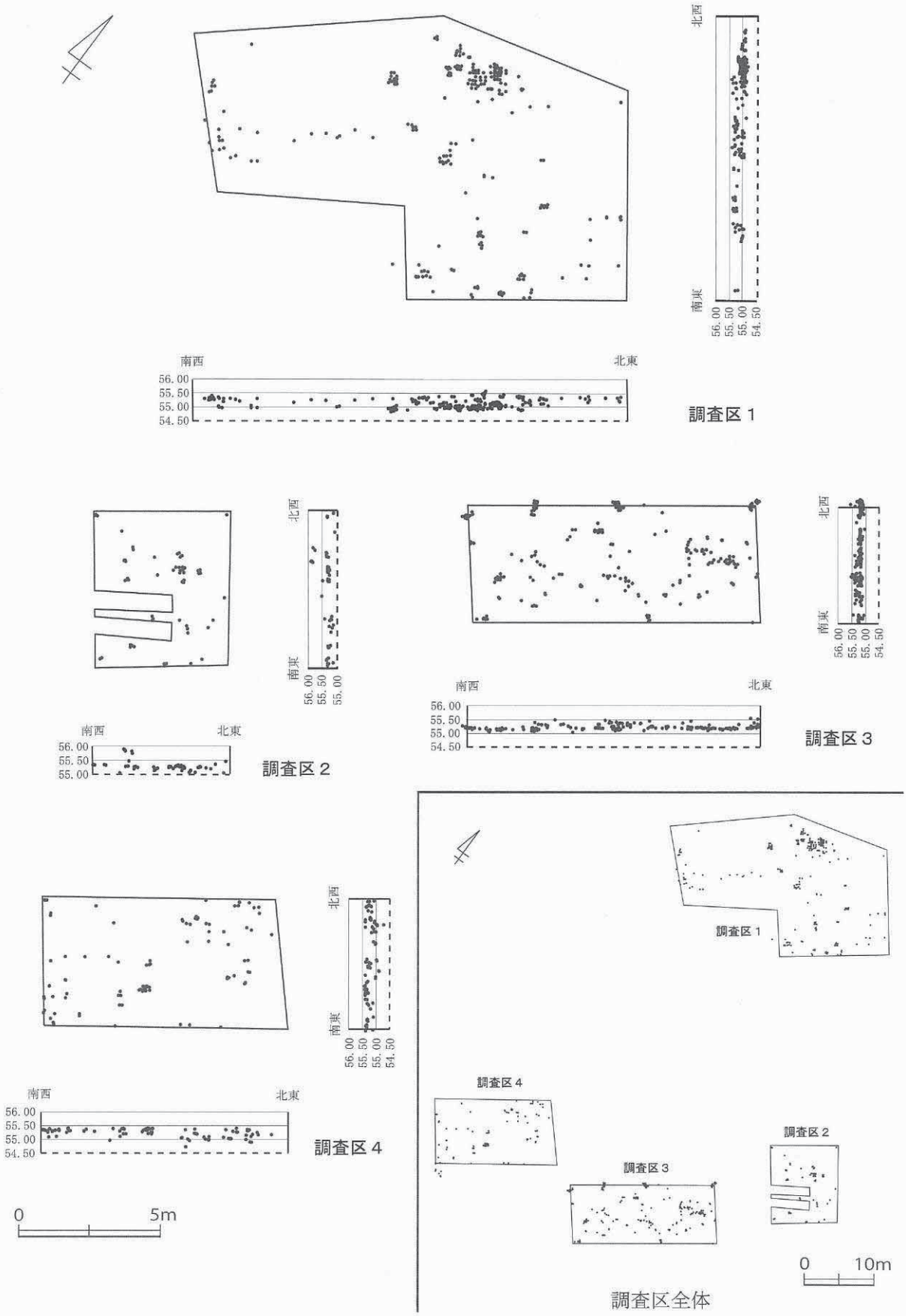
### 平面と垂直分布（第６図）

各調査区内のボーリング探査では、582点の反応を確認し、そのすべての座標値・標高値を記録した。結果、礫と思われる反応点は地表下約20～90㎝の範囲に分布しており、地表下約50㎝の標高55.4m付近に集中することがわかった。次節で述べる試掘調査ではTP2で配石が検出されている。その配石の標高は約55.3mであり、この結果と符合する。他のTP1では標高約55.1m付近で検出されている。TP1は古代の住居跡の可能性があることから地表下から深い位置での反応は、後世の利用などによって生じている可能性がある。つまり、今回の調査によって確認された反応地点の一部は配石の原位置を保っていないと考えることから、深度のばらつきを精査し、原位置を保っている可能性の高い深度範囲を設定して、今後検討する必要がある。

（朝倉一貴・加藤元康）



第５図　測量数値を活用した三次元動画




第６図　調査区全体及び各調査区の平面と垂直分布

## 第３節　試掘

第２節のボーリング探査で配石が調査区全域に広がっていることが判明したことから、配石の残存状況を確かめるために、反応地点の集中する箇所と同じ状態で調査対象域の中央付近に試掘坑を設定した。具体的には調査区１内の北側にTP１とその西側にTP３を、調査区３内の東側にTP２を設定した（第３図）。

ここでは各TPの配石検出・土層堆積状況を主に述べる。出土遺物は１点を除いて、第４節で他の資料とともに記載した。

### TP１・TP３（第７図、図版３）

TP１は東西80cm、南北90cmで、その西側30cmを空けて、東西90cm、南北60cmのTP３を設定した。配石と思われた石材は表土下約50～60cmに確認できた。土層堆積状況はおおむねロームブロック・ローム粒が含まれており、後述するTP２の土層堆積状況と異なった。このような石材の検出状況や土層堆積の特徴、出土遺物などから、原位置を保っていないと判断し、TP１のみ石を外し、さらに掘り下げ作業を行なった。その結果、直上に薄くシルト質の層が堆積している厚さ約15cmの貼り床層を確認した。このことから、検出された石材は、住居内の埋没過程で何らかの要因により、混入したものであると思われる。

**出土遺物**

出土遺物は土師器・須恵器が少量出土している。ほとんどが破片であり、器形を復元できる資料はない。坏の口縁部と甕の体部の破片と思われる（図版５）。

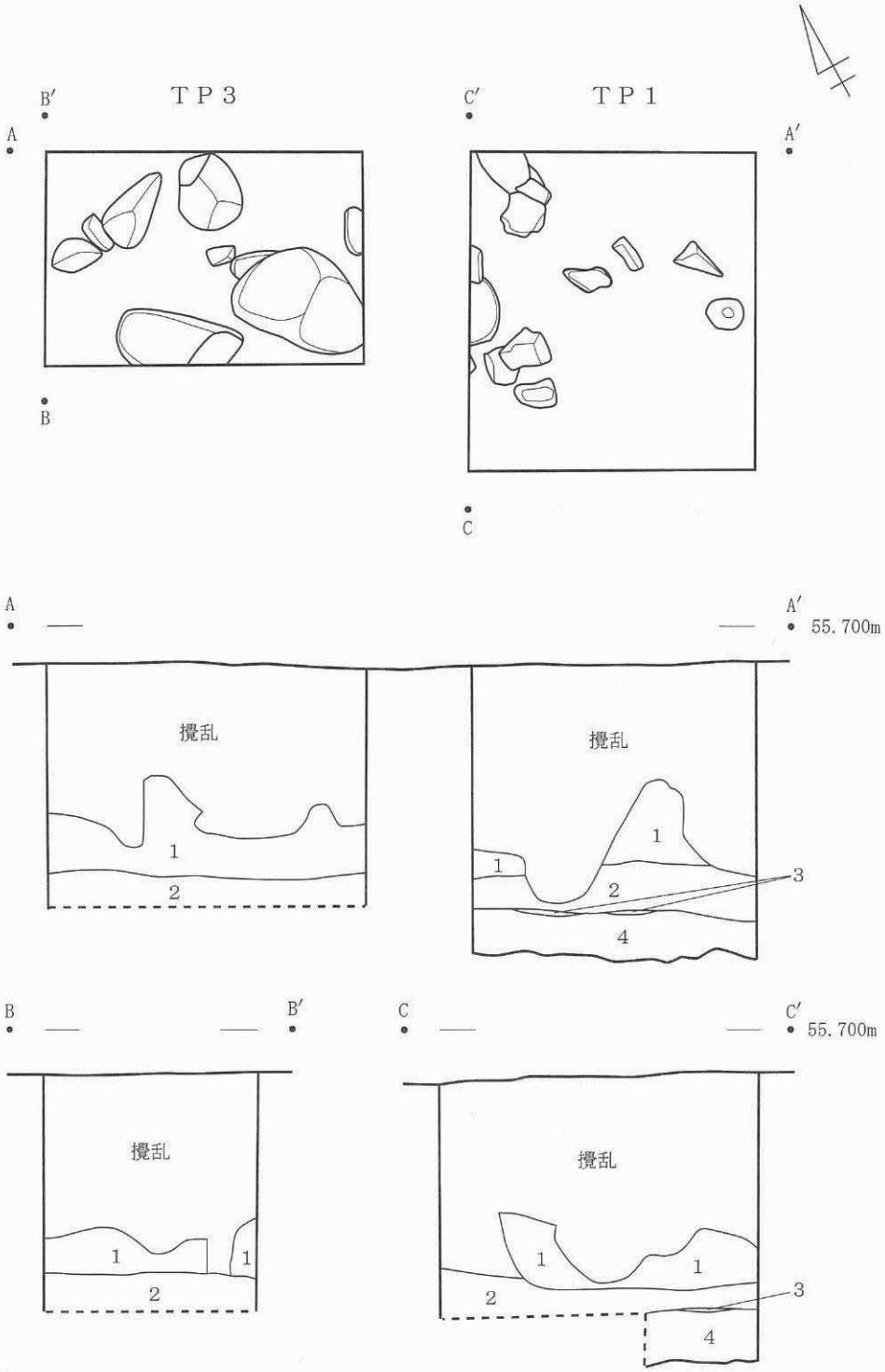
### TP２（第８図、図版２）

TP２は東西に120cm、南北に105cmで設定した。表土下約30～40cmに平面的に石材が分布し、土層堆積状況は十和田Aテフラを含む層が残存し、その下に検出面の黒色土層が広がっている。これらのことから、保存状態の良好な配石の一部と判断した。さらに、配石下の堆積状況を確認するために、配石の希薄な部分を掘り下げた。それにより配石層から穿たれたピットと思われる遺構を確認している。堆積状況から３層は盛土の可能性があるとも考えられたが、範囲が狭いために今後の課題とする。

**出土遺物**

出土遺物は縄文土器片や磨製石斧の破片、土師器の坏などが出土し、配石と思われる石材の中には凹石が確認された。１は底部回転糸切り痕を有する土師器の坏で、東側の壁際１層中より出土した（図版２中段）。１層は十和田Aテフラ（西暦915年）を含んでいることから、10C以降の平安時代に属すると思われる。他の遺物については第４節で述べている。

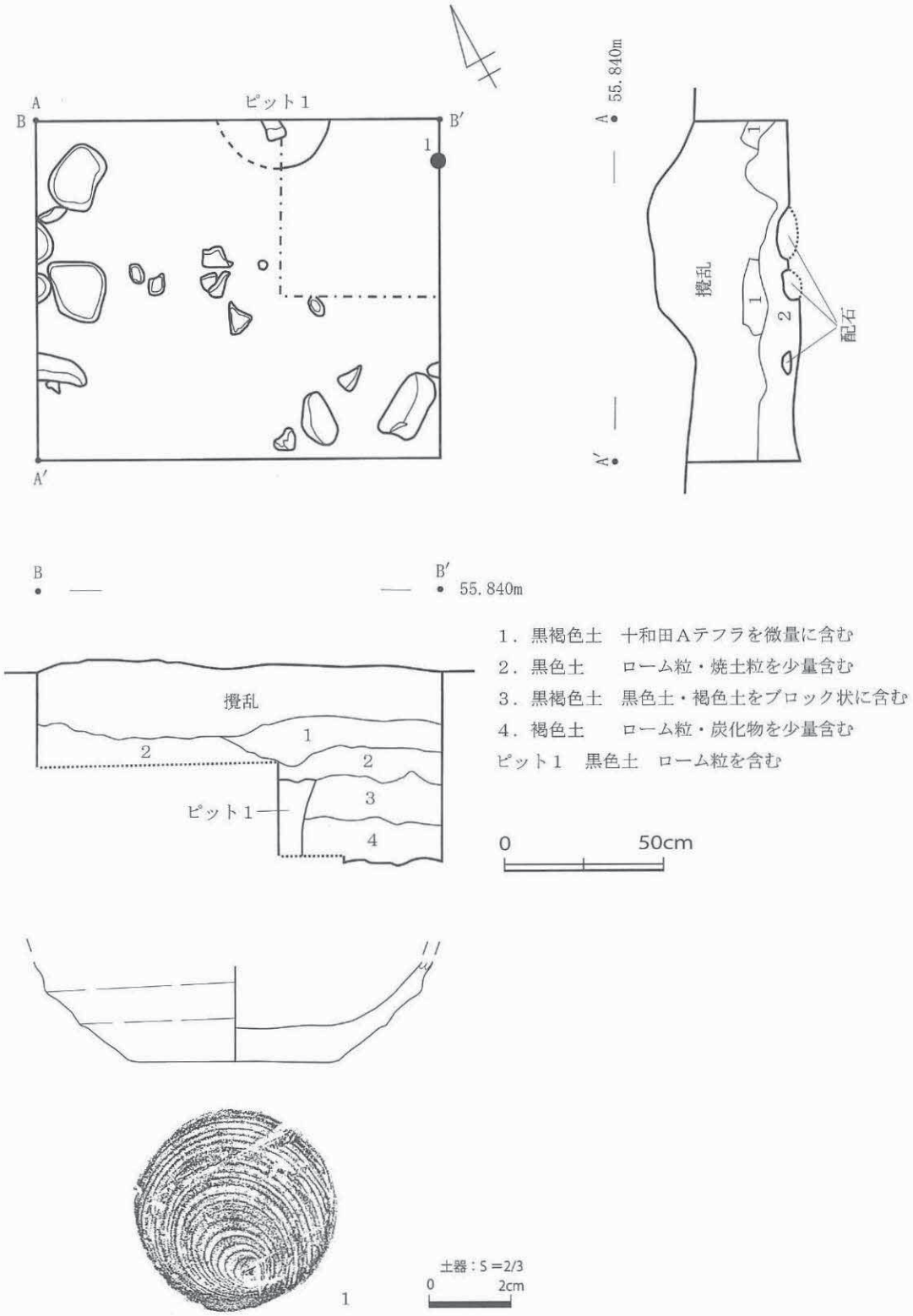
（加藤元康）




1．暗褐色土　ロームブロックを若干、ローム粒を少量、白色粒を少量含む
2．暗褐色土　ロームブロック・ローム粒を多量に含む
3．明灰褐色土　シルト
4．黄褐色土　主にロームブロック、ブロック状の黒色土を含む（貼り床）

0　50cm

**第7図　TP1・TP3**




第8図　TP2及び出土遺物

## 第４節　出土・表面採集・佐藤家所蔵資料

ここでは、1958年の出土資料のうち所在の確認ができた鷹巣農林高校付属農林博物館所蔵（現北秋田市教育委員会所蔵）の資料、地権者の佐藤健一氏が所蔵していた資料、2009年及び2010年の表面採集資料の一部、試掘調査の際に出土した資料について述べる。なお、2010年の表採資料については、時間的制約から土器のみを掲載し、石器・石製品については写真のみで示している。これらの資料は今後の調査とともに、報告する予定である。

（加藤元康）

**土器**（第９～11図、第１～３表、図版４・５）

１）試掘出土土器

TP１は、土師器坏の破片など古代の土器が出土している（図版５）。

TP２は縄文時代の資料がまとまって出土している（第９図１～11、図版４）。１～３は口縁部資料で、横位の沈線（幅2㎜～4㎜）によって区画される。２は沈線区画内に縄文LRが横回転で施文される。４は口唇部に一つ窪みを持つ無文の土器片である。５・６は胴部資料で、沈線区画内に縄文LR（５）、縄文RL（６）を横回転で施文する。また６の表面の一部が剥離しているが、「焼成破裂痕」(田崎2007）に類似しており、焼成時に剥離した可能性がある。７～10は胴部資料で、幅約２㎜ほどの沈線によって文様が施され、７は沈線区画内に縄文LRを横回転で施文し、９は縄文Lを横回転で充填している。10は胴部下半部の破片資料であるが、上端部に縄文LRが横回転で施され、その下部は無文になる。本資料の内外面にはスス・コゲの付着が見られる。これらの破片資料は、いずれも縄文時代後期前半期の十腰内Ⅰ式土器の範疇で捉えられると考えられる。特色としては、縄文LRが多用され、横回転による施文が特徴的である。その他、土師器の坏などが出土している（第８図１）。

TP３からは、土師器の破片が出土している（図版５）。

２）表面採集資料および佐藤家所蔵資料

表採資料の多くは、縄文時代後期前葉（十腰内Ⅰ式期）にあたる土器片である。そのなかでも、時期判別可能な資料を中心に報告する（第９図12～23、第10図1～28、第11図１～15、図版４・５）。

最初に、第９図12～23は2009年の現地踏査で表採した資料である。12と13は横位の沈線文が施され、12は沈線施文後に表面に磨きが加えられる。13は縄文LRが斜め方向に回転施文される。14は比較的薄手の胴部資料で、横位の沈線区画とその上部に曲線的文様が幅約１㎜程の細沈線で描かれる。沈線の一部は、幅約３㎜ほどの平行沈線によるものも認められる。15～18は、地文縄文のみの土器片で、すべて縄文LRの横回転施文である。15・18は外面に吹きこぼれによる滴り痕が残る。また16の内面には焼成前に付いたと考えられる無数の線状圧痕が確認され、これらの圧痕は４本単位で幅３㎜弱、長さ１㎜～３㎜の正体不明の圧痕である。19～23は無文の破片資料で、胴部と底部である。23の底部は、底面の外側にも磨きが加えられる。

第10図１～28・第11図１～15は、2010年のボーリング探査時に表採した資料である。１～18は口縁部資料で、多くは口縁部に横位の沈線がめぐる。口唇部の形状は、①溝がめぐるもの（１）、②平坦部を持つもの（２・５・12～16）、③丸味を持つかやや尖るもの（３～10・11・17・18）などがある。１～３・５～７は、沈線区画内に縄文を伴う資料であり、縄文LRやLの横回転施文が特徴的に見られる。沈線は、幅２㎜～３㎜にまとまる。１や４は、横長の楕円区画や円形文などが見られる。４・８～17は口縁部資料で、１本から２本の沈線によって横位に区画する。９は波状口縁の波頂下に楕円状の隆帯区画が貼付され、10や12は弧状の沈線文が認められる。沈線は、細いものでは約1.5㎜のものもあるが、ほとんどが２㎜～３㎜の幅にまとまる。18～23は胴部資料で、横位の沈線文に加えて地文縄文を持つものである。沈線文は、横位に加えて縦位の懸垂文も認められる。沈線の幅は、２㎜～３㎜幅にまとまる傾向がある。縄文はLやLRの横回転施文で、沈線描出後に施されたものと考えられるが、沈線によって切られるものが多い。これは縄文施文後に、沈線を引き直しているためと想定される。第10図24～28・第11図１～８は胴部資料で、横位や斜位などの沈線文が描かれるものである。沈線文は、やはり横位区画文が多いが、弧状沈線文や斜位沈線文、三角形区画などもある。沈線の多くは、２㎜～３㎜の幅に収まるが、僅か

に１㎜や４㎜の細いものや太目のものも存在する。これらの沈線は、単沈線で描かれるが、６のように２本単位の平行沈線文も認められる。９は管状刺突文が施されるもので、地文に縄文Lが横回転で施文される。10～14は、地文縄文のみのものと無文の土器である。10は口縁部の上端は縄文LRを横回転で施文するが、その下部は縄文LRを縦方向に回転方向を変えて施文している。11は無文土器で、胴部に屈曲部が見られる。12は器壁厚のやや厚みのある底部に近い部分で、地文に撚糸LRが施される。13は撚糸Rによる網目状撚糸文である。14は底径約4.8cmの底部資料で、粘土帯部分で欠損して内傾する接合面が確認できる。また底面端部には、何らかの楕円状の種子状圧痕（長さ約９㎜×４㎜）が残る。15は渦巻状の突起で、やや新しい十腰内Ⅱ式（山崎2005）に比定される。

第11図16・17は、佐藤家所蔵資料である。16は十腰内Ⅰ式土器の胴部資料で、３本１組の沈線が斜めに垂下し、縄文LRが横回転で施文される。17は波状口縁の深鉢で、沈線（幅約２㎜）により幅広の縄文帯と無文部が区画され、縄文LRが横回転で充填される。無文部には、良く磨きが加えられる。この資料は、十腰内Ⅱ式土器と考えられる。

（阿部昭典）

**石器・石製品**（第12～14図、第４表、図版６～８）

１）1958年出土石器・石製品

1958年の調査では、磨製石斧２点、打製石斧１点、三脚石器３点、三脚石器未製品１点、スクレイパー５点、石刀と称しているスクレイパー類６点、石槍１点が出土し、三脚石器１点が表採されている。現在、その所在が確認できたのは三脚石器３点と打製石斧１点のみである（第12図１～４、図版６）。

１は頁岩製の三脚石器で、両面の一部に原礫面を残している。「３ｔ拡」との注記があることから、第４サークルの外から発見された資料と思われる。２は頁岩製の三脚石器で、両面の一部に原礫面を残しているほか、表面に黒色の付着物が認められる。「４ｔ」の注記から第９サークルからの出土資料と思われる。３は脚部の一つが欠損し、両面の一部に原礫面を残している三脚石器である。「２ｔ」の注記から第１・２サークルの外より出土した資料である。４は大形の頁岩製打製石斧である。「２ｔ拡」との注記から３と同様に、第１・２サークル外より出土した資料である。

２）試掘出土石器

TP２から緑色凝灰岩製の磨製石斧（第12図５、図版６）が出土した。刃部以外を大きく欠損している。

３）表面採集資料

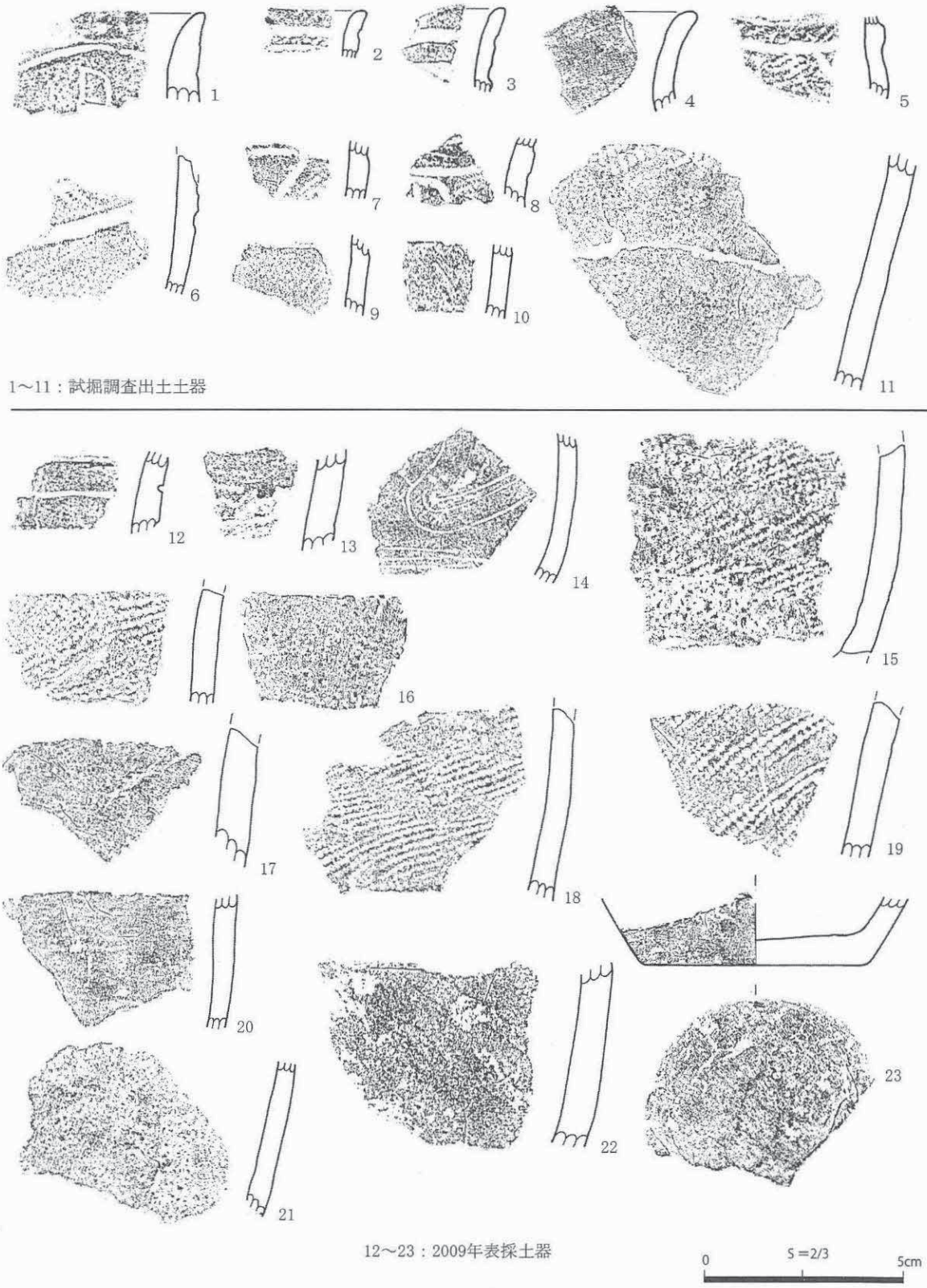
2009年の踏査時に表採されたスクレイパーと石皿について報告する（第12図６～11、図版６）。６は頁岩製のスクレイパーで細かい調整を入れて、刃部を形成している。７・８は不定形の剝片の一部に調整を加えた頁岩製のスクレイパーである。９・10・11は砂岩製の縁を有する石皿で、９の裏面と10の両面には線状の太い凹みが残されていることから、砥石として使用されたと考えられる。

2010年に表採された資料は写真のみで図化していない。石鏃、石錐、磨製石斧、スクレイパー、石核、三脚石器、凹石、石皿などがある。その他、環状配石の構築材と思われる柱状節理の石も採集されている（図版７・８）。

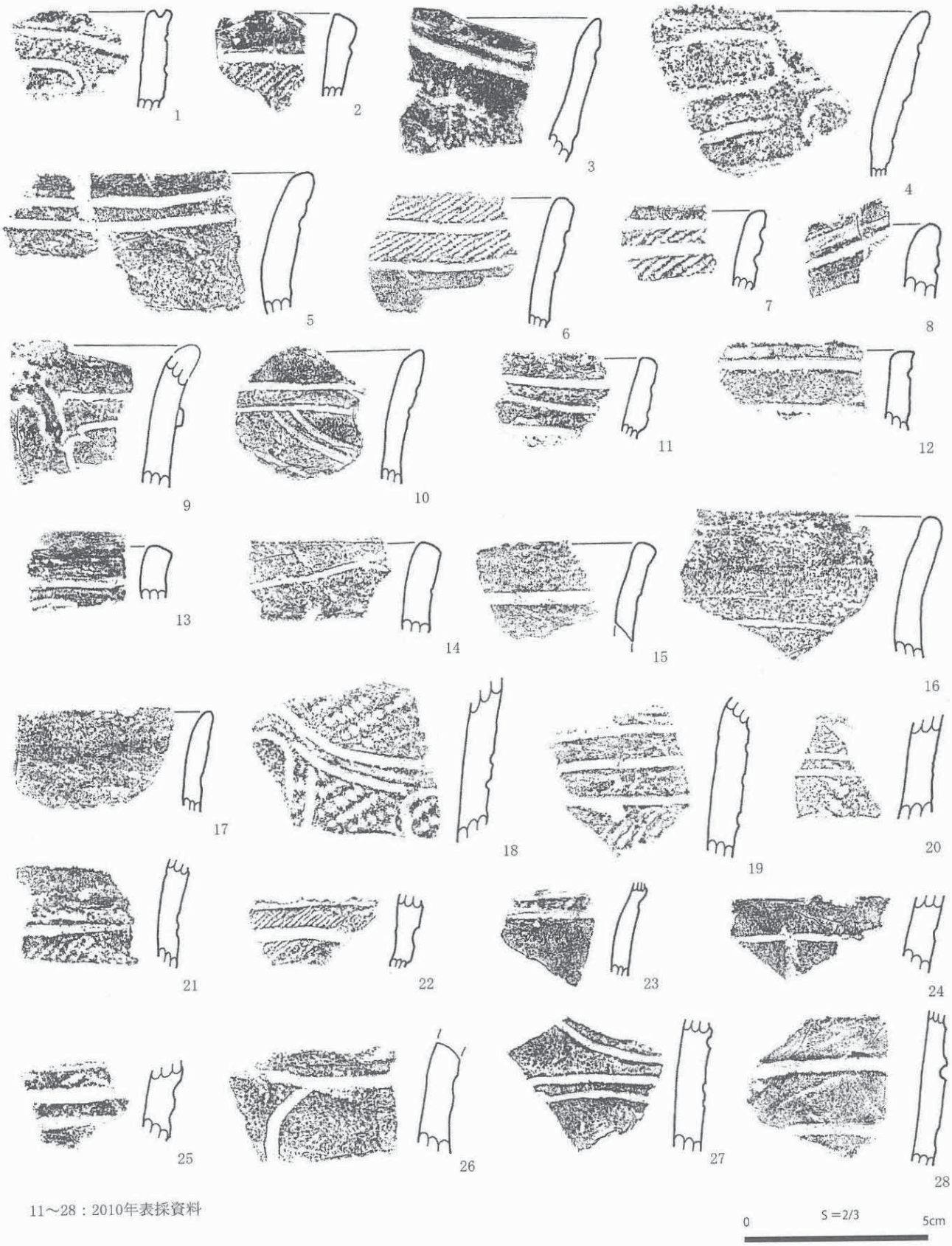
４）佐藤家所蔵石器・石製品

佐藤家には三脚石器８点、三脚石器未製品１点、スクレイパー３点が所蔵されていた（第13・14図、図版７）。第13図１は頁岩製スクレイパーで片側側縁のみ微細な調整が施されている。２・３は不定形の剝片の一部に微細な調整を施している頁岩製のスクレイパーである。４は三脚石器であるが、脚部の先端に削器に特徴的な調整を加えており、スクレイパーとしても使用していると思われるが、二次的利用と考えられる。５・６は大形の三脚石器で、６は脚部の一部を欠損している。いずれも頁岩製である。第14図１～５は頁岩製の三脚石器である。６は脚部および裏面の整形が充分に行なわれていないことから、三脚石器の未製品の可能性がある。

（加藤元康）

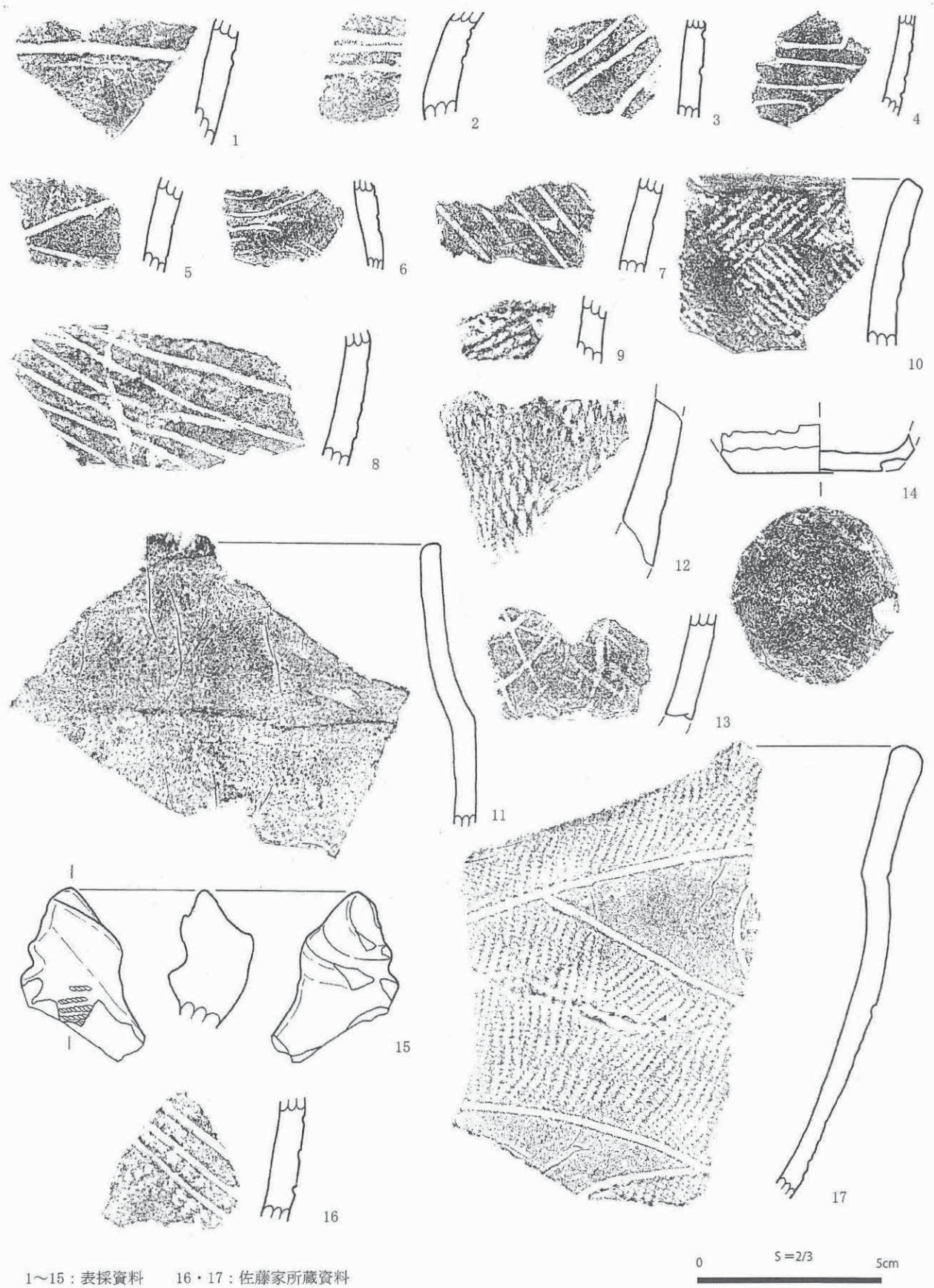



第９図　出土土器及び表採資料



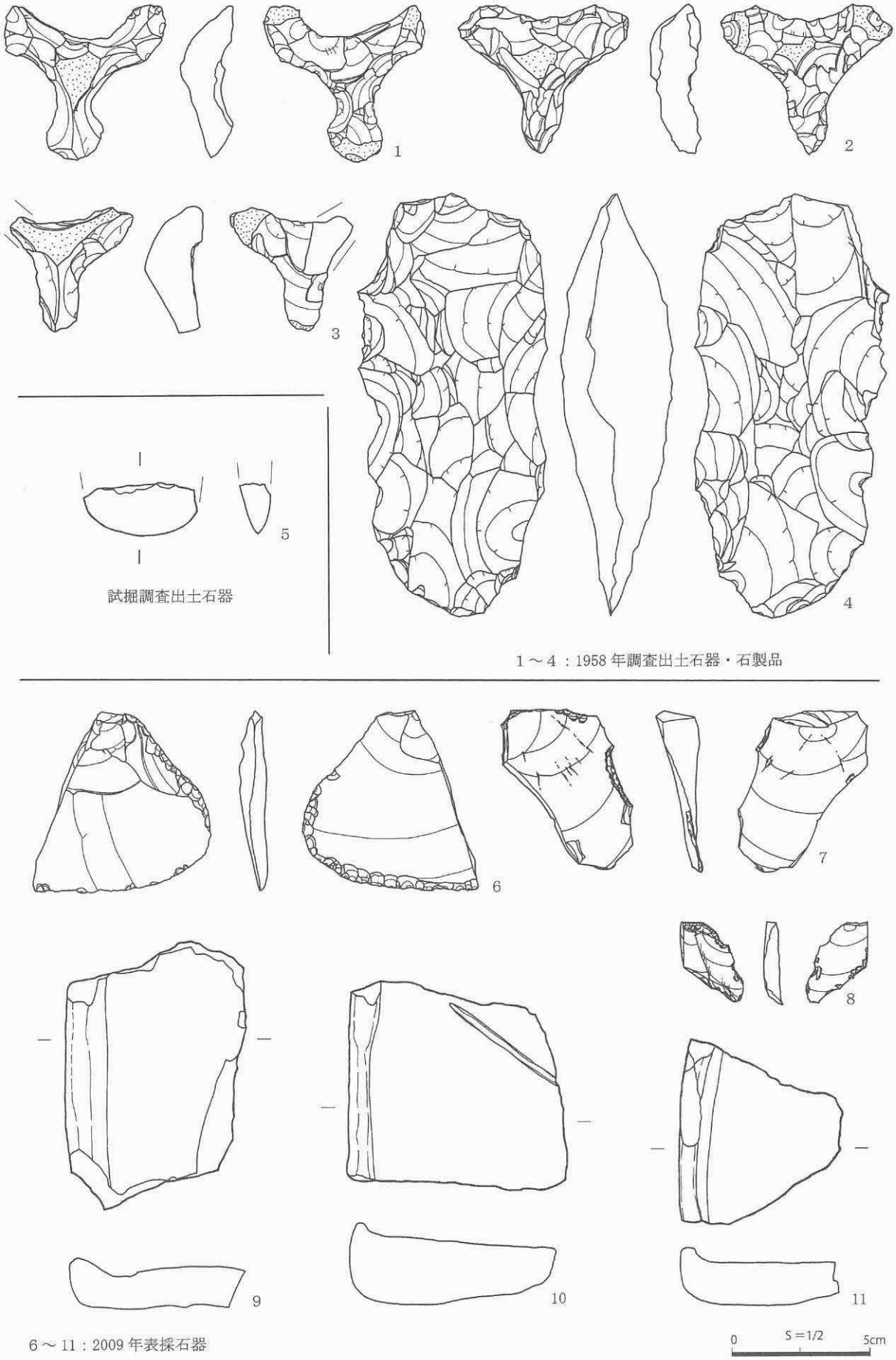

11～28：2010年表採資料

第10図　表採土器資料（1）

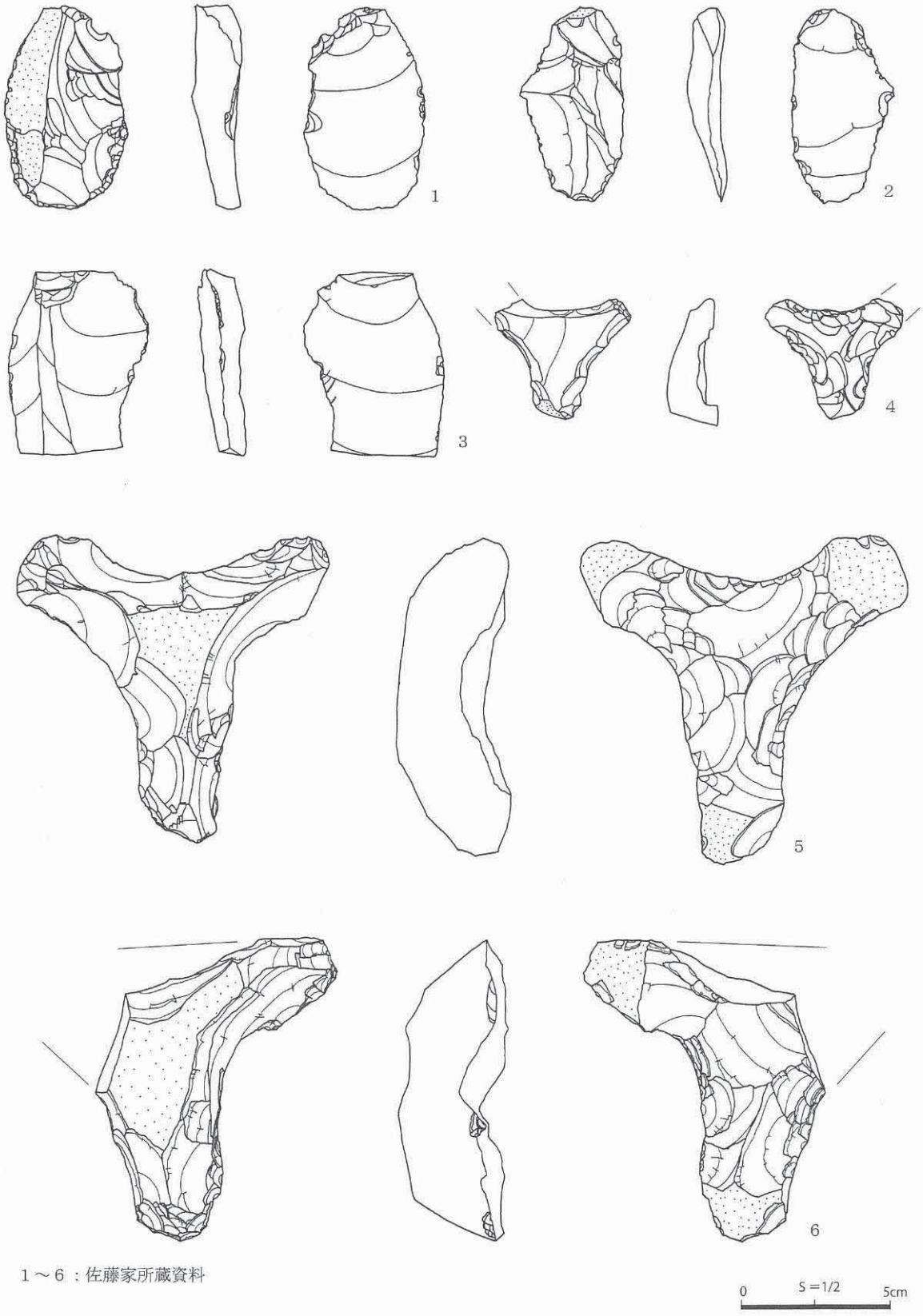



1～15：表採資料　　16・17：佐藤家所蔵資料

第11図　表採土器資料（2）

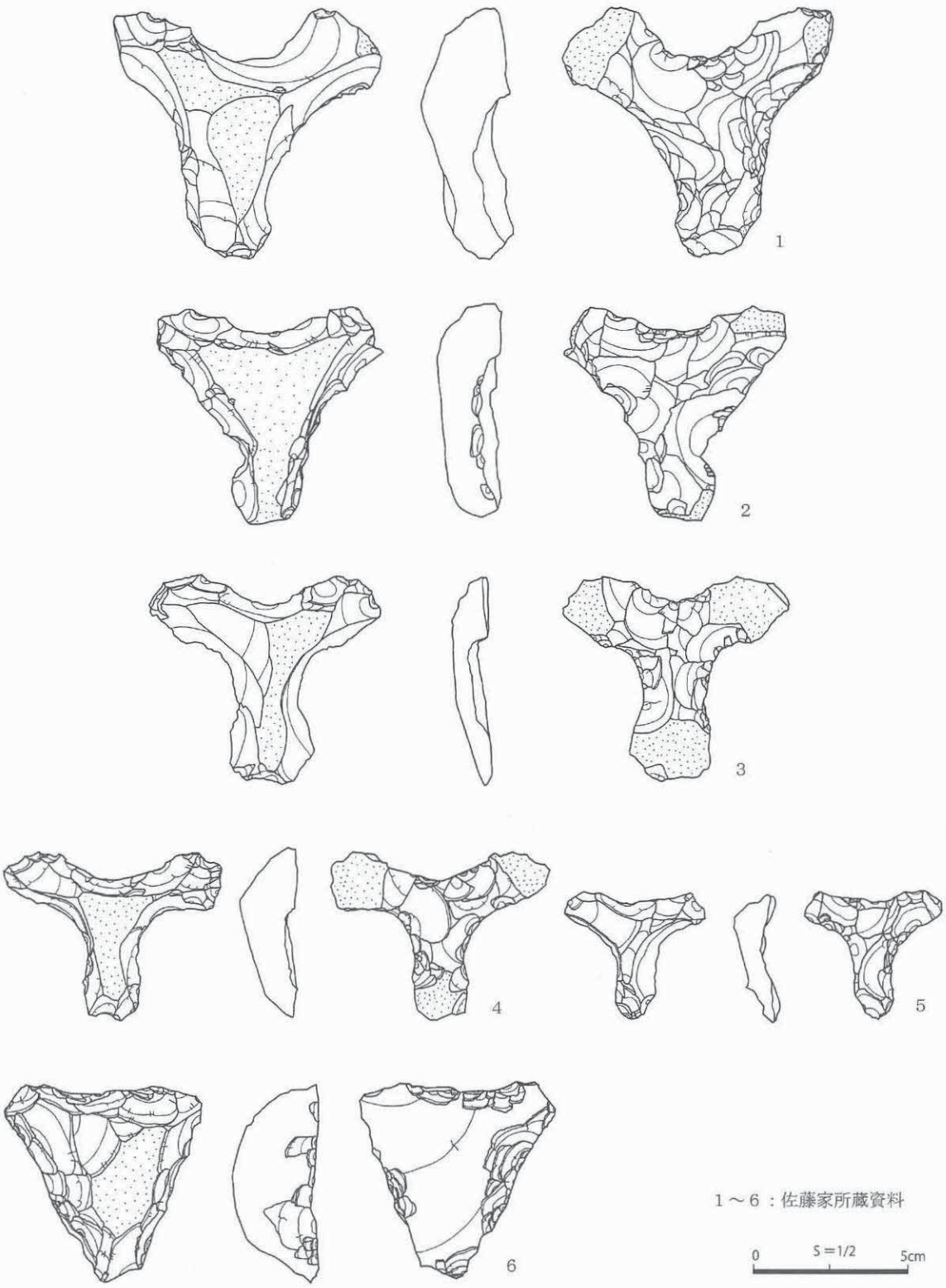



**第12図　出土及び表採石器・石製品**




1～6：佐藤家所蔵資料

第13図　佐藤家所蔵石器・石製品資料




第14図　佐藤家所蔵石製品資料

## 第1表　土器観察表（1）

| 地点 | 挿図番号<br>図版番号 | 器種 | 残存状態 | 口径<br>底径<br>器高 | 文様 | 胎　土 | 色　調 | 技法の特徴 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| TP2 | 第8図-1<br>図版5 | 土師器<br>坏 | 体部下端1/4<br>～底部 | —<br>5.0<br>— | — | 長石・石英 | 内：5YR7/8<br>外：5YR7/6 | 体部：ロクロナデ<br>底部：回転糸切り | |
| TP2 | 第9図-1<br>図版4 | 縄文<br>深鉢 | 口縁部 | —<br>—<br>— | 横位沈線区画 | 砂粒、石英 | 表：10YR6/3<br>裏：10YR6/3 | 表：磨き横<br>裏：磨き横 | |
| TP2 | 第9図-2<br>図版4 | 縄文<br>深鉢 | 口縁部 | —<br>—<br>— | 横位沈線区画、<br>縄文LR | 砂粒 | 表：10YR6/4<br>裏：10YR6/4 | 表：—<br>裏：磨き横 | |
| TP2 | 第9図-3<br>図版4 | 縄文<br>深鉢 | 口縁部 | —<br>—<br>— | 横位沈線区画 | 砂粒、石英 | 表：10YR5/4<br>裏：10YR5/4 | 表：—<br>裏：磨き横 | |
| TP2 | 第9図-4<br>図版4 | 縄文<br>深鉢 | 口縁部 | —<br>—<br>— | — | 砂粒、石英 | 表：10YR3/3<br>裏：10YR4/6 | 表：磨き横<br>裏：磨き横 | |
| TP2 | 第9図-5<br>図版4 | 縄文<br>深鉢 | 胴部 | —<br>—<br>— | 横位沈線区画、<br>縄文LR | 砂粒、カク<br>セン石 | 表：2.5Y7/4<br>裏：2.5Y7/4 | 表：—<br>裏：磨き横 | |
| TP2 | 第9図-6<br>図版4 | 縄文<br>深鉢 | 胴部 | —<br>—<br>— | 沈線区画文、縄<br>文LR | 砂粒、石英 | 表：2.5Y8/3<br>裏：2.5Y4/1 | 表：磨き横<br>裏：— | 表面破裂痕 |
| TP2 | 第9図-7<br>図版4 | 縄文<br>深鉢 | 胴部 | —<br>—<br>— | 三角形区画文、<br>縄文LR | 砂粒、石英 | 表：10YR8/3<br>裏：2.5Y8/2 | 表：—<br>裏：— | |
| TP2 | 第9図-8<br>図版4 | 縄文<br>深鉢 | 胴部 | —<br>—<br>— | 横位沈線区画 | 砂粒、石英 | 表：2.5Y7/2<br>裏：10YR6/4 | 表：磨き横<br>裏：磨き横 | |
| TP2 | 第9図-9<br>図版4 | 縄文<br>深鉢 | 胴部 | —<br>—<br>— | 沈線区画文、縄<br>文L | 砂粒 | 表：10YR5/4<br>裏：10YR4/4 | 表：磨き横<br>裏：磨き横 | |
| TP2 | 第9図-10<br>図版4 | 縄文<br>深鉢 | 胴部 | —<br>—<br>— | 横位沈線区画 | 砂粒、石英 | 表：10YR4/2<br>裏：10YR4/2 | 表：磨き斜<br>裏：磨き横 | |
| TP2 | 第9図-11<br>図版4 | 縄文<br>深鉢 | 胴部 | —<br>—<br>— | 縄文LR | 砂粒、石<br>英、雲母 | 表：7.5YR7/6<br>裏：7.5YR7/6 | 表：磨き横<br>裏：磨き縦 | |
| 表採 | 第9図-12<br>図版5 | 縄文<br>深鉢 | 胴部 | —<br>—<br>— | 横位沈線区画 | 砂粒、小礫 | 表：2.5Y8/3<br>裏：2.5Y8/3 | 表：磨き横<br>裏：磨き横 | |
| 表採 | 第9図-13<br>図版5 | 縄文<br>深鉢 | 胴部 | —<br>—<br>— | 横位沈線区画 | 砂粒、小礫 | 表：7.5YR6/6<br>裏：10YR6/4 | 表：—<br>裏：磨き縦 | |
| 表採 | 第9図-14<br>図版5 | 縄文<br>深鉢 | 胴部 | —<br>—<br>— | 横位沈線区画、<br>曲線文 | 砂粒 | 表：10YR3/1<br>裏：2.5Y7/2 | 表：磨き横<br>裏：磨き横 | |
| 表採 | 第9図-15<br>図版5 | 縄文<br>深鉢 | 胴部 | —<br>—<br>— | 縄文LR | 砂粒、小礫 | 表：2.5Y8/3<br>裏：2.5Y7/4 | 表：—<br>裏：磨き横 | |
| 表採 | 第9図-16<br>図版5 | 縄文<br>深鉢 | 胴部 | —<br>—<br>— | 縄文LR | 砂粒、石英 | 表：2.5Y8/2<br>裏：2.5Y8/2 | 表：—<br>裏：磨き縦 | 内面に不明の<br>圧痕。 |
| 表採 | 第9図-17<br>図版5 | 縄文<br>深鉢 | 胴部 | —<br>—<br>— | 縄文LR | 砂粒 | 表：10YR7/4<br>裏：10YR5/4 | 表：磨き斜<br>裏：磨き縦 | |
| 表採 | 第9図-18<br>図版5 | 縄文<br>深鉢 | 胴部 | —<br>—<br>— | 縄文LR | 砂粒 | 表：10YR6/4<br>裏：2.5Y7/3 | 表：磨き縦<br>裏：磨き縦 | |
| 表採 | 第9図-19<br>図版5 | 縄文<br>深鉢 | 胴部 | —<br>—<br>— | — | 砂粒、石英 | 表：2.5Y7/3<br>裏：2.5Y7/3 | 表：磨き横<br>裏：磨き横 | |
| 表採 | 第9図-20<br>図版5 | 縄文<br>深鉢 | 胴部 | —<br>—<br>— | — | 砂粒、石英 | 表：10YR6/6<br>裏：10YR6/6 | 表：磨き縦<br>裏：磨き縦 | |
| 表採 | 第9図-21<br>図版5 | 縄文<br>深鉢 | 胴部 | —<br>—<br>— | — | 砂粒、小礫 | 表：2.5Y7/4<br>裏：2.5Y8/3 | 表：磨き縦・横<br>裏：磨き横 | |
| 表採 | 第9図-22<br>図版5 | 縄文<br>深鉢 | 胴部 | —<br>—<br>— | — | 砂粒、小礫 | 表：2.5Y7/4<br>裏：2.5Y8/2 | 表：磨き斜<br>裏：磨き横 | |
| 表採 | 第9図-23<br>図版5 | 縄文<br>深鉢 | 底部 | —<br>6<br>— | — | 砂粒、石英 | 表：2.5Y7/4<br>裏：2.5Y7/4 | 表：磨き縦<br>裏：磨き横など | |
| 表採 | 第10図-1<br>図版4 | 縄文<br>深鉢 | 口縁部 | —<br>—<br>— | 横位沈線区画、<br>縄文LR | 砂粒、石英 | 表：10YR6/6<br>裏：10YR6/6 | 表：磨き横<br>裏：磨き横 | |
| 表採 | 第10図-2<br>図版4 | 縄文<br>深鉢 | 口縁部 | —<br>—<br>— | 沈線区画文、縄<br>文LR | 砂粒、石英 | 表：7.5YR7/6<br>裏：10YR7/4 | 表：磨き横<br>裏：磨き横 | |
| 表採 | 第10図-3<br>図版4 | 縄文<br>深鉢 | 口縁部 | —<br>—<br>— | 横位沈線区画、<br>縄文RL | 砂粒、石英 | 表：2.5Y7/4<br>裏：2.5Y7/4 | 表：磨き横<br>裏：磨き横 | |

## 第2表　土器観察表（2）

| 地点 | 挿図番号 | 器種 | 残存状態 | 口径<br>底形<br>器高 | 文様 | 胎　土 | 色　調 | 磨き | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 表採 | 第10図-4<br>図版4 | 縄文<br>深鉢 | 口縁部 | —<br>—<br>— | 横位楕円区画文、円形文 | 小礫、石英 | 表：10YR8/4<br>裏：10YR8/4 | 表：磨き横<br>裏：磨き横 | |
| 表採 | 第10図-5<br>図版4 | 縄文<br>深鉢 | 口縁部 | —<br>—<br>— | 横位沈線区画、縄文LR？ | 砂粒、石英 | 表：2.5Y7/3<br>裏：2.5Y7/3 | 表：磨き横<br>裏：磨き横 | |
| 表採 | 第10図-6<br>図版4 | 縄文<br>深鉢 | 口縁部 | —<br>—<br>— | 横位磨消縄文帯（LR） | 砂粒 | 表：2.5Y7/4<br>裏：2.5Y5/4 | 表：磨き横<br>裏：磨き横 | |
| 表採 | 第10図-7<br>図版4 | 縄文<br>深鉢 | 口縁部 | —<br>—<br>— | 横位磨消縄文帯（L） | 砂粒、石英 | 表：2.5Y3/1<br>裏：2.5Y5/2 | 表：磨き横<br>裏：磨き横 | |
| 表採 | 第10図-8<br>図版4 | 縄文<br>深鉢 | 口縁部 | —<br>—<br>— | 横位沈線区画 | 砂粒 | 表：2.5Y3/1<br>裏：2.5Y6/4 | 表：磨き横<br>裏：磨き横 | |
| 表採 | 第10図-9<br>図版4 | 縄文<br>深鉢 | 口縁部 | —<br>—<br>— | 楕円状懸垂文、横位沈線文 | 砂粒、石英 | 表：2.5Y6/2<br>裏：2.5Y7/3 | 表：磨き横<br>裏：磨き横 | 内外面に不明の圧痕。 |
| 表採 | 第10図-10<br>図版4 | 縄文<br>深鉢 | 口縁部 | —<br>—<br>— | 横位沈線区画、弧状懸垂文 | 砂粒 | 表：2.5Y5/3<br>裏：2.5Y3/1 | 表：磨き横<br>裏：磨き斜 | |
| 表採 | 第10図-11<br>図版4 | 縄文<br>深鉢 | 口縁部 | —<br>—<br>— | 横位沈線区画 | 砂粒 | 表：2.5Y7/2<br>裏：2.5Y7/3 | 表：磨き横<br>裏：磨き横 | |
| 表採 | 第10図-12<br>図版4 | 縄文<br>深鉢 | 口縁部 | —<br>—<br>— | 横位沈線区画 | 砂粒、カクセン石 | 表：2.5Y7/3<br>裏：2.5Y7/3 | 表：磨き横<br>裏：磨き横 | |
| 表採 | 第10図-13<br>図版4 | 縄文<br>深鉢 | 口縁部 | —<br>—<br>— | 横位沈線区画 | 砂粒、石英 | 表：10YR6/3<br>裏：2.5Y7/3 | 表：磨き横<br>裏：磨き横 | |
| 表採 | 第10図-14<br>図版4 | 縄文<br>深鉢 | 口縁部 | —<br>—<br>— | 横位沈線区画 | 砂粒 | 表：2.5Y8/2<br>裏：10YR8/3 | 表：磨き横<br>裏：磨き横 | |
| 表採 | 第10図-15<br>図版4 | 縄文<br>深鉢 | 口縁部 | —<br>—<br>— | 横位沈線区画 | 小礫、石英 | 表：10YR5/3<br>裏：2.5Y5/3 | 表：磨き横<br>裏：磨き横 | |
| 表採 | 第10図-16<br>図版4 | 縄文<br>深鉢 | 口縁部 | —<br>—<br>— | 横位沈線区画 | 小礫、石英 | 表：2.5Y8/2<br>裏：2.5Y7/3 | 表：磨き横<br>裏：磨き横 | |
| 表採 | 第10図-17<br>図版4 | 縄文<br>深鉢 | 口縁部 | —<br>—<br>— | — | 砂粒 | 表：2.5Y8/2<br>裏：2.5Y4/3 | 表：磨き横<br>裏：磨き横 | |
| 表採 | 第10図-18<br>図版4 | 縄文<br>深鉢 | 口縁部 | —<br>—<br>— | 弧状懸垂文、縄文LR | 砂粒、石英 | 表：10YR8/3<br>裏：10YR8/4 | 表：—<br>裏：磨き横 | |
| 表採 | 第10図-19<br>図版4 | 縄文<br>深鉢 | 胴部 | —<br>—<br>— | 横位沈線区画、縄文L | 砂粒、石英 | 表：10YR7/4<br>裏：2.5Y7/3 | 表：磨き横<br>裏：磨き横 | |
| 表採 | 第10図-20<br>図版4 | 縄文<br>深鉢 | 胴部 | —<br>—<br>— | 横位沈線区画、縄文LR | 砂粒 | 表：2.5Y7/4<br>裏：10YR7/4 | 表：磨き横<br>裏：磨き横 | |
| 表採 | 第10図-21<br>図版4 | 縄文<br>深鉢 | 胴部 | —<br>—<br>— | 横位沈線区画、縄文LR | 砂粒、石英 | 表：2.5Y6/2<br>裏：2.5Y6/2 | 表：磨き横<br>裏：磨き横 | |
| 表採 | 第10図-22<br>図版4 | 縄文<br>深鉢 | 胴部 | —<br>—<br>— | 横位沈線区画、縄文L | 砂粒 | 表：10YR4/2<br>裏：2.5Y8/2 | 表：—<br>裏：磨き横 | |
| 表採 | 第10図-23<br>図版4 | 縄文<br>深鉢 | 胴部 | —<br>—<br>— | 横位沈線区画、縄文 | 砂粒、石英 | 表：7.5YR6/6<br>裏：7.5YR6/6 | 表：磨き横<br>裏：磨き横 | |
| 表採 | 第10図-24<br>図版4 | 縄文<br>深鉢 | 胴部 | —<br>—<br>— | 横位沈線区画 | 砂粒、石英 | 表：2.5Y7/2<br>裏：2.5Y7/4 | 表：磨き横<br>裏：磨き斜 | |
| 表採 | 第10図-25<br>図版4 | 縄文<br>深鉢 | 胴部 | —<br>—<br>— | 横位沈線区画 | 砂粒 | 表：2.5Y7/4<br>裏：10YR6/6 | 表：磨き横<br>裏：磨き横 | |
| 表採 | 第10図-26<br>図版4 | 縄文<br>深鉢 | 胴部 | —<br>—<br>— | 横位沈線区画、弧状沈線文 | 砂粒、小礫 | 表：10YR6/4<br>裏：2.5Y7/4 | 表：磨き横<br>裏：磨き横 | |
| 表採 | 第10図-27<br>図版4 | 縄文<br>深鉢 | 胴部 | —<br>—<br>— | 横位沈線区画、弧状沈線文 | 砂粒、石英 | 表：10YR5/3<br>裏：2.5Y8/3 | 表：—<br>裏：磨き斜・横 | |
| 表採 | 第10図-28<br>図版4 | 縄文<br>深鉢 | 胴部 | —<br>—<br>— | 横位沈線区画 | 砂粒、石英 | 表：10YR8/3<br>裏：2.5Y7/3 | 表：磨き横<br>裏：磨き横 | |
| 表採 | 第11図-1<br>図版4 | 縄文<br>深鉢 | 胴部 | —<br>—<br>— | 横位沈線区画 | 砂粒、石英 | 表：2.5Y7/3<br>裏：10YR7/3 | 表：磨き横・縦<br>裏：磨き横 | |
| 表採 | 第11図-2<br>図版4 | 縄文<br>深鉢 | 胴部 | —<br>—<br>— | 横位沈線区画 | 砂粒 | 表：2.5Y8/2<br>裏：2.5Y8/2 | 表：磨き横<br>裏：磨き横 | |

## 第3表　土器観察表（3）

| 地点 | 挿図番号 | 器種 | 残存状態 | 口径<br>底形<br>器高 | 文様 | 胎　土 | 色　調 | 磨き | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 表採 | 第11図-3<br>図版4 | 縄文<br>深鉢 | 胴部 | —<br>—<br>— | 三角形区画文 | 砂粒、石英 | 表：2.5Y7/4<br>裏：2.5Y7/1 | 表：—<br>裏：磨き横 | |
| 表採 | 第11図-4<br>図版4 | 縄文<br>深鉢 | 胴部 | —<br>—<br>— | 横位沈線文 | 砂粒 | 表：10YR7/6<br>裏：2.5Y7/4 | 表：磨き横<br>裏：磨き横 | |
| 表採 | 第11図-5<br>図版4 | 縄文<br>深鉢 | 胴部 | —<br>—<br>— | 三角形区画文 | 砂粒、石英 | 表：2.5Y5/2<br>裏：10YR8/4 | 表：磨き横・縦<br>裏：磨き横 | |
| 表採 | 第11図-6<br>図版4 | 縄文<br>深鉢 | 胴部 | —<br>—<br>— | 弧状沈線文（平行沈線） | 砂粒、石英 | 表：2.5Y8/4<br>裏：2.5Y8/4 | 表：磨き横<br>裏：磨き横 | |
| 表採 | 第11図-7<br>図版4 | 縄文<br>深鉢 | 胴部 | —<br>—<br>— | 斜位沈線文 | 砂粒 | 表：2.5Y8/3<br>裏：2.5Y3/1 | 表：—<br>裏：— | |
| 表採 | 第11図-8<br>図版4 | 縄文<br>深鉢 | 胴部 | —<br>—<br>— | 斜位沈線文 | 砂粒、小礫 | 表：2.5Y6/2<br>裏：2.5Y7/2 | 表：磨き横<br>裏：磨き横 | 光沢のある黒色付着物。 |
| 表採 | 第11図-9<br>図版4 | 縄文<br>深鉢 | 胴部 | —<br>—<br>— | 管状刺突文、縄文L | 砂粒、小礫 | 表：5YR5/6<br>裏：10YR6/4 | 表：—<br>裏：磨き横 | |
| 表採 | 第11図-10<br>図版4 | 縄文<br>深鉢 | 胴部 | —<br>—<br>— | 縄文LR | 砂粒、石英 | 表：2.5Y8/3<br>裏：2.5Y7/4 | 表：—<br>裏：磨き横 | |
| 表採 | 第11図-11<br>図版4 | 縄文<br>深鉢 | 口縁部 | —<br>—<br>— | — | 砂粒、石英 | 表：2.5Y7/3<br>裏：2.5Y7/3 | 表：磨き横<br>裏：磨き横・斜 | |
| 表採 | 第11図-12<br>図版4 | 縄文<br>深鉢 | 胴部 | —<br>—<br>— | 撚糸LR | 砂粒、石英 | 表：10YR6/4<br>裏：10YR6/4 | 表：—<br>裏：磨き縦 | 内面に棒状の圧痕。 |
| 表採 | 第11図-13<br>図版4 | 縄文<br>深鉢 | 胴部 | —<br>—<br>— | 網目状撚糸文（撚糸R） | 砂粒、石英 | 表：2.5Y7/2<br>裏：2.5Y7/2 | 表：—<br>裏：磨き横 | |
| 表採 | 第11図-14<br>図版4 | 縄文<br>深鉢 | 底部 | —<br>4.5<br>— | — | 砂粒 | 表：7.5Y7/6<br>裏：2.5Y7/3 | 表：磨き横<br>裏：磨き横 | 底部に種子状圧痕。 |
| 表採 | 第11図-15<br>図版4 | 縄文<br>深鉢 | 口縁部 | —<br>—<br>— | 渦巻状突起、縄文RL | 砂粒 | 表：10YR5/8<br>裏：7.5Y5/8 | 表：磨き横<br>裏：— | |
| 表採 | 第11図-16<br>図版4 | 縄文<br>深鉢 | 胴部 | —<br>—<br>— | 斜位沈線文、縄文LR | 砂粒 | 表：2.5Y7/3<br>裏：10YR5/3 | 表：—<br>裏：磨き横 | |
| 表採 | 第11図-17<br>図版5 | 縄文<br>深鉢 | 口縁～胴部 | —<br>—<br>— | 三角形区画文、縄文LR | 砂粒 | 表：7.5Y6/6<br>裏：7.5Y6/8 | 表：磨き横<br>裏：磨き横 | |

## 第4表　石器・石製品観察表

| 地点 | 挿図 | 図版 | 製品名 | 石　材 | 残存状態 | 計測値(cm. g) | | | | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | 長さ | 幅 | 厚さ | 重さ | |
| 3 T | 第12図-1 | 図版6 | 三脚石器 | 頁岩 | 完形 | 10.6 | 5.8 | 1.1 | 27 | 1958年資料 |
| 4 T | 第12図-2 | 図版6 | 三脚石器 | 頁岩 | 完形 | 5.3 | 6.8 | 1.8 | 31 | 1958年資料 |
| 2 T | 第12図-3 | 図版6 | 三脚石器 | 頁岩 | 一部欠損 | 4.5 | <4.3> | 1.5 | 16 | 1958年資料 |
| 2 T | 第12図-4 | 図版6 | 打製石斧 | 頁岩 | 完形 | 14.8 | 6.5 | 4.0 | 349 | 1958年資料 |
| TP 2 | 第12図-5 | 図版6 | 磨製石斧 | 緑色凝灰岩 | 欠損 | <1.8> | <4.0> | <1.1> | 10 | |
| 表採 | 第12図-6 | 図版6 | スクレイパー類 | 頁岩 | 欠損 | 6.4 | <6.4> | 1.0 | 43 | 2009年表採 |
| 表採 | 第12図-7 | 図版6 | スクレイパー類 | 頁岩 | 完形 | 5.8 | 4.6 | 1.5 | 24 | 2009年表採 |
| 表採 | 第12図-8 | 図版6 | スクレイパー類 | 頁岩 | 完形 | 3.0 | 2.1 | 2.0 | 2 | 2009年表採 |
| 表採 | 第12図-9 | 図版6 | 石皿 | 砂岩 | 欠損 | <8.5> | <6.4> | 1.7 | 118 | 2009年表採 |
| 表採 | 第12図-10 | 図版6 | 石皿 | 砂岩 | 欠損 | <7.7> | <7.2> | 2.4 | 184 | 2009年表採 |
| 表採 | 第12図-11 | 図版6 | 石皿 | 砂岩 | 欠損 | <6.5> | <5.8> | 1.5 | 64 | 2009年表採 |
| 表採 | 第13図-1 | 図版7 | スクレイパー類 | 頁岩 | 完形 | 6.7 | 3.9 | 1.5 | 41 | 佐藤家所蔵資料 |
| 表採 | 第13図-2 | 図版7 | スクレイパー類 | 頁岩 | 完形 | 6.3 | 3.4 | 1.1 | 18 | 佐藤家所蔵資料 |
| 表採 | 第13図-3 | 図版7 | スクレイパー類 | 頁岩 | 欠損 | 6.2 | 4.4 | 1.3 | 36 | 佐藤家所蔵資料 |
| 表採 | 第13図-4 | 図版7 | 三脚石器 | 頁岩 | 一部欠損 | 4.0 | <4.3> | 1.7 | 16 | 佐藤家所蔵資料 |
| 表採 | 第13図-5 | 図版7 | 三脚石器 | 頁岩 | 完形 | 10.0 | 10.2 | 2.8 | 165 | 佐藤家所蔵資料 |
| 表採 | 第13図-6 | 図版7 | 三脚石器 | 頁岩 | 欠損 | <9.9> | <8.1> | 3.6 | 190 | 佐藤家所蔵資料 |
| 表採 | 第14図-1 | 図版7 | 三脚石器 | 頁岩 | 完形 | 6.3 | 8.6 | 2.4 | 96 | 佐藤家所蔵資料 |
| 表採 | 第14図-2 | 図版7 | 三脚石器 | 頁岩 | 完形 | 4.5 | 5.1 | 1.5 | 32 | 佐藤家所蔵資料 |
| 表採 | 第14図-3 | 図版7 | 三脚石器 | 頁岩 | 完形 | 6.5 | 7.5 | 1.3 | 40 | 佐藤家所蔵資料 |
| 表採 | 第14図-4 | 図版7 | 三脚石器 | 頁岩 | 完形 | 4.5 | 5.1 | 1.5 | 32 | 佐藤家所蔵資料 |
| 表採 | 第14図-5 | 図版7 | 三脚石器 | 頁岩 | 完形 | 4.2 | 4.5 | 1.4 | 11 | 佐藤家所蔵資料 |
| 表採 | 第14図-6 | 図版7 | 三脚石器未製品 | 頁岩 | 完形 | 6.4 | 6.4 | 2.8 | 90 | 佐藤家所蔵資料 |

# 第４章　小結

**成果の概要**

本調査は、石倉岱遺跡の基礎情報の収集・整理を目的に行なっている。その各調査成果は第４章で述べられているために、ここではその成果内容をまとめ、今後の検討課題を述べることにする。

本遺跡は第１章で述べたように、遺跡の所在・過去の調査と現況などが時間的経過によって、明確ではなかった。今回の調査では、それらを明らかにすることができた。過去の調査は聞き取り調査でもあったように佐藤家の畑を中心に行なわれており、ボーリング探査や試掘などにより、配石は未だ良好な状態で残存している可能性が高いことが判明した。また、その範囲が今回の調査対象域から畠山家の道路際まで広がっており、かなり広範囲に渡って分布していると思われる。米代川流域に特徴的な複数の環状列石と照らし合わせて考えると興味深く、その点についても検討する必要がある。ほぼ完形の壺形土器が出土している点や、近くの畑における石の出方なども配石分布とそのまとまりを検討する材料となると思われる。

遺物は三脚石器を多く確認することができた。また、検出された配石は河原石のような小さな石が多く使用されている。これらの特徴は伊勢堂岱遺跡などの傾向と一致する。一方、本遺跡の土器資料から十腰内Ⅰ式を中心に、十腰内Ⅱ式の土器片が確認された。伊勢堂岱遺跡は十腰内Ⅰ式を主体とし、十腰内Ⅱ式の土器が出土していないことから、時期的な差異が認められる。今後の調査ではその点についても充分に検討すべき課題であろう。

その他には土師器や須恵器などの古代の遺物が出土し、住居と思われる土層堆積状況を確認できたことも挙げられる。本遺跡では古代の遺物は今まで報告されていない。七日市石倉岱地域の歴史を知る上で重要な成果と思われる。伊勢堂岱遺跡でも古代の住居が検出されていることも考え合わせると、縄文と古代の土地利用を比較検討する材料となろう。

本調査によって、遺跡の基礎情報が整理され、今後、検討すべき視点が多く確立された。本遺跡の調査を継続的に行ない、本地域を含めた東北地方北部の事例と比較検討しながら、当時の人々の心の解明に尽力したい。

（加藤元康・阿部昭典）

**引用・参考文献**

秋田県　1960　『秋田県史』考古編、秋田県（秋田）
榎本剛治　2008　「十腰内Ⅰ式土器」『総覧縄文土器』530～535頁、アム・プロモーション（東京）
大和久震平　1958　『北秋田郡鷹巣町七日市石倉岱ストン・サークル』秋田県立鷹巣農林高等学校郷土史研究部報告第四冊（秋田）
大和久震平　1962　「秋田県鷹巣町石倉岳遺跡」『日本考古学年報11』日本考古学協会、誠文堂新光社（東京）
田崎博之　2007　「土器焼成失敗品からみた焼成方法と生産体制」『考古学リーダー９　土器研究の新視点』181～202頁、六一書房（東京）
冨樫泰時　2003　『秋田の博物館』秋田文化出版（秋田）
畠山益穂　1998　『草一途―畠山益穂遺稿集』畠山洋子（秋田）
山岸英夫　2005　「福島県から十腰内Ⅱ式土器を考える」『北奥の考古学』149～160頁、葛西勵先生還暦記念論文集刊行会（青森）

研究協力締結記念講演会

# 日本列島における石信仰

講演者：杉山林継

杉山でございます。ただいまご紹介いただきました通り、70歳の定年を迎え、大学を３月に定年退職いたしました。大学としては名誉教授をいただいております。大学院は客員教授であります。この度、北秋田市と協力関係を大学が結ぶということで、いろいろと地元の皆様には大学としてもご迷惑をおかけするとは思いますが、よろしくお願いいたします。

この間、ＮＨＫ教育テレビで佐野史郎さんの「なぞの石学」という番組が６月28日月曜日の夜遅い10時30分過ぎの番組でして、その一回目に助っ人で出演しました。その時もパワーストーンで、この頃そういうのが流行っていまして、日本人の石好きと言いますか、石に対する好のみがでていると思うのです。その番組は「極める」という総合タイトルで、月曜日ごとに４回、最後の４回目がまだなのです。そして、再放送が一週間後にあるのですが、これが今度は朝の５時半ごろという時間帯なのです。一回目のだけは17日、土曜日に特別再放送があるそうです。佐野さんと、島根県へ行って、いろいろな信仰対象になっていた石について、少し手伝いました。ああいうときにはいろいろ間違いもありまして、１回目の放送を聞かれた方は佐野史郎さんが埴輪にある格好をして、拝んでいるようなことをやった。その説明、ナレーションが弥生時代の埴輪にある姿でと。弥生時代には埴輪はないのですから。私はすぐに電話しましたら、再放送の時には直してあった。さすがＮＨＫ、指摘されれば直すのだと思いました。そういう手伝いをしたときに感じたのですが、石に日本人は結構興味を持つと言いますか、こだわると思いました。

大場磐雄先生が「我が国における石信仰」という論文を報告書に載せております。約60年くらいの昔の話であります。その大場先生の論文を、もう一度読み直してみました。『大湯環状列石』の最後のところにある「我が国における石信仰」、副題が「大湯町環状列石解明の比較資料として」という論文です。その後、60年経って、どう変化してきたか。変化してきたような、変化してないような、60年間、何していたんだと言われると、まあいろいろあるのですが、大場先生ももちろんその後、昭和50年に亡くなるまでずっと研究を続けられていましたし、各地で、その後、発掘調査がたくさん行われまして、その中には、石の信仰に関係するものがかなり多く調査されていることも事実であります。そのようなことから、もう少し細かく何かが見えてきているのかという言う方ができるのですが、もう一度、大場先生の論文をみてみますと、かなりその頃の段階で大場先生が書いています。実は今日、これをお話しする中に縄文時代のものを少しだけいれときましたが、その時から注目されていた遺跡がその後も、見過ごされているというものもあります。今日は１時間ということで、お話しします。

大場先生はその後に遺跡に関する考え方で、祭祀遺跡という定義を行いました。遺跡を調査して、そこから祭りに関係した遺物が発見されれば、これは当然祭祀の遺跡だということが言える。さらにいうなれば、その後の信仰形態はどうなのかということを大場先生はかなり重視しました。つまり、民間信仰などでその遺跡がどう扱われていたのかということを大事にしていまして、場合によっては祭祀遺物がでていないけど、将来でるかもしれない、調査すればでるかもしれない。そこに石があって、岩があって、この石が民間では今なお信仰されている。そのようなところを遺物が発見されていなくても、「祭祀関係の遺跡」として祭祀遺跡とは少し分けるのですけれども、近接して祭祀関係の遺跡として扱われていました。

これは、今後調査することによって、遺物が発見されることもあるでしょうし、みなさんもご存知の通り、考古学というのは残っているものを対象にします。だいたい石は残ります。木製品はだいたいなくなってしまいます。こちらにある胡桃館遺跡のような特殊な状況で、埋まっていれば残ることもあるのですけれども、そうでなければなくなります。今、神社で使っているようなものが、石のそばで、たとえば玉串をあげたとしても、100年、

200年経てばなくなってしまう。当然、1000年、2000年が経てばなくなってしまう。布があったり、植物性のものがあったりする訳ですね。全国をみてますと、金とか、銀とか、銀も錆びてしまいにはなくなってしまうけれど、金はほとんど残っています。金銀銅鉄というような金物はだんだん鉄になればなるほど腐って無くなっていく。中国では鉛で作った鏡もあるのですけども、ぼろぼろになって早く無くなってしまう。そういうものがある訳ですね。そういうことからすると残されたものだけから判断しているのですけれども、残されたものだけがすべてではないとみていかなければならない。そのようなことを教わりながら、私も来た訳です。そして大場先生が書かれた約60年後にお話しできるということは大変ありがたいことだと思いながら、今日、お話ししています。

実は、私の専門は古墳時代が中心です。縄文時代は少し交えながらお話させていただきます。石の信仰で、形からいきますと、あるいは民間信仰なども含めて考えますと、石そのものに神様が宿る、神が憑依するということから、その石を拝むやり方、これを石神としています。これは、民俗のほうで柳田国男先生が書かれている石神問答などあります。こういう石神的な信仰、人の形に似ているとか、立っている岩だとか、そういうものを拝んでいるのは、神様がその石にとりついたという形態で拝んでいる。ところが、もうひとつ磐座といわれているものがある。

石があって、その石に神様が座られる、あるいは立っていてもいいのですけども、いずれにしても石の上に神様が来られる。それをお祭りするというやり方をしているのが磐座なんです。なかには大きな岩もあり、この部屋の半分くらいある岩があり、もっと大きな岩もあります。そういう大きなものから小さなものまで、茨城県鹿島神宮要石も、30cmほどのものでして、持ち上げたら持ち上げられるだろうと思うくらいで。沢庵の重しの石くらいしかないのですけれども、昔から信仰されて、要石だといわれています。大きさは関係ない。だけれども、そこに神様が来られる、立たれる、あるいは座られるという。これを磐座と言っています。

鹿島の要石は本当かどうかわかりませんが、水戸光圀がどのくらいあるか掘ってみようと言ったという話がある。まさかそんなことは言わないと思うのですが。しかし、掘ってみたらば、ずっと下に繋がっていた。それはナマズの頭を押さえている。それが地震押さえです。鹿島の神主さんにここは地震ないのかと言ったら、「いや、地震はありますよ」と言っていました。ナマズの頭を押さえる。まんざら嘘でもないかなと思ったのは、実はあの石は花崗岩の石みたい。花崗岩の岩っていうのは下の方にずっと根を張っていくことがあります。そして、あれは筑波山の方から花崗岩の石がずっとこうあって、鹿島神宮のところが一番地面の中に見えない状態で入っている。それはすぐ傍にある「みたらしの池」のところで水道の工事をしようとして、掘っていったならば、大盤石でもって掘れなかったという話がある。そういうことからすると、もしかすると御影の花崗岩の大盤石の頭が少し出ているのかもしれません。それはそう単純ではないかもしれませんが、そういう磐座がある。それからもう一つ磐境と言っているものがある。

磐境と言っているのはなかなか難しいですが、だいたい人間がそのお祭りするために作った施設だと思っていただければいいだろうと思う。小さい石を積んで、小さな山にするとか、あるいは多少囲いって言いますか、一定の場所に石を並べて作るとか、そういう祭りの神様を迎えるための施設だという風に考えれば、磐境というのは大体良いと思う。この中間的なものもあります、石神と磐座の中間的もあったり、磐座と磐境の中間的なものもあったりするのですから、必ずしもしっかりと分けられるわけではありませんが、およそはそういう風に分けて考える。今のは石の話ですけれども、樹木でも樹に神様が宿る、山に宿るとか、そういう事はある訳で、あるいはそれが人間に宿ってしまうと神がかりになってしまう訳ですけども、そういうことだってありうるということであります。そういうように考えていきますと、石に関係して、祭りをやるとしても、それはいくつかに分類しながら、考えることができる。

縄文時代を考えてみますと、縄文時代の石を並べる、つまり列石だとか、配石だとか、石を並べていく訳です。かなり規模の大きなものもありますけども、ある意味では祭りの場を造っていくことになりますので、さきほど言ったようなことからすると磐境的な雰囲気かと考えることができます。ただ、その中に立っている石はあるいは石神的な存在であるかもしれない。それから平らな石と言いますか、割合と背の低い石がでんと構えているよ

うなものがあるとするならば、これは磐座的なものであると言えるかもしれない。ただ全体としての施設とするならば、これは磐境的に考えても良いのではないかと思う。ただし、反論もあると思う。

環状列石とか配石遺構を少しは私も見ているのですが、かなりバラエティーに富んでいる。いろいろと形がある。これはまた本当に専門にやっている人たちが、いろいろと分類しながら、当時の彼らが何考えていたのだろうと追い掛けてもらわないとそう簡単にはいかないことだと思います。

実は市内の阿仁根子というところまで連れて行ってもらって、今日初めて私は鮭石といいますか、文様の書いた石を見せてもらってきました。前からみたいと思っていまして、廃校した小学校のところまで、連れて行ってもらいました。あれは縄文時代の石だと言っている訳でして、それの調査例がなかなかないのですね。あの石の周囲がどうなっていたかという報告は、根子の石も動かしたそうですけれども、前にあったところを探し出して、そこを調査してみると良いかと思うのです。最近になって、いくつか面白い例が出ている。それが山梨県女夫石遺跡です。それは2.4mから2.5m、縦横2.5m、高さが1.7mの石なんですね。巨石だと言っていますけども。その巨石のところに、石棒が何本もあったり、周囲から土偶がでてきたり、いろんなものが出てきた。その出方はいかにも縄文人がその石を中心にマツリをやっていたという考え方しかできないような遺跡が出ています。これは大変面白い事でして、縄文時代のそういう例はあんまりないのです。

ところが、先ほど言った大場先生の論文の中にやはり山梨県に一つの巨石のそばから石棒が出ているという例がある。それは大場先生の仲の良い友達の一人に、八幡一郎先生がおられた。八幡一郎先生が大正14年に人類学雑誌に報告されている例から大場先生が引いている。それを見ていましたら、その女夫石遺跡のすぐ近くなのです。県境を越えて長野県に入ったところに、尖石遺跡がある。これも縄文の遺跡としては有名です。その尖石という石は今でもある。あの周辺からも出てくる可能性もある。というのは、八ヶ岳の南側に、そういう遺跡がある。縄文時代でもそういう石をどうみていたか注意する必要があります。まだ資料が足りませんけれども、のちの古墳時代の磐座などの信仰にかなり近いものも縄文時代からあるということです。また縄文時代のお墓の中に石を使っているものもあります。ですから、墓に関係して縄文時代の石の使い方も考えてみないといけない、配石墓など、まだまだこれから考えていかなければならないだろうと思います。

弥生時代ですが、大場先生はこの時に石に関して、弥生時代の銅鐸が出てきたところの話をしています。ですけれども、たとえば銅鐸の出た遺跡で滋賀県大岩山銅鐸があります。大岩山銅鐸、名前が「おおいわやま」です。山の頂上からも銅鐸がでていますし、中腹からも何個もでている。そういうところですけど、あまり岩との関係を銅鐸に結び付けて言っている報告はないんです。ただ、千葉県の佐倉に歴史民俗博物館あります。あそこにいた佐原真さんが編集して、書いた弥生の銅鐸の話の本のなかに、銅鐸が発見されたときの復元した絵がある。その絵は大きな岩の上から子供たちが銅鐸掘っているのをみている。という事は、大岩山とも言いますし、つまり、佐原さんは岩がそばにあることを意識している。また発掘のときの写真もある。発掘の写真を見ますと、なんか岩がごろごろしている。ごろごろしていて、どうなっていたのかわかりませんけれども。これは大岩山と呼ばれている山ですし、銅鐸が何箇所からも出ているという事はもしかしたら、岩がかなり関係していた可能性がある。

大場先生が引いているのは広島の木の宗山というところ、今でも岩が屹立していますけども、中腹に遠くからよく見える岩が立っている。それは大場先生が引用しています。それから気比の銅鐸と言われた海に近い、河口に近いところですけども、そこにある岩の陰から銅鐸が４個出ています。島根県の加茂岩倉銅鐸の岩倉は実はちょっと離れているところにある。銅鐸の埋まっていたところに磐座があるわけではないのですけれども。地名は「いわくら」と言うところです。名前だけで岩倉銅鐸と言っているから、磐座があるのかなと思ってしまうと、少なくても発見された段階では大きな石はその現場近くにありません。それは私もすぐ行ったのですが、それはない。それから荒神谷銅鐸もあります。荒神谷銅鐸もそれは大きな岩、目印になるような岩はない。つまり岩がないところもあることも確かです。しかしなくなったかどうかは別問題で、弥生時代には岩のそばに銅鐸を埋めたものもある。そうじゃないものもある。また、岩のそばで後までお祭りしていた例では、和歌山県新宮市のゴトビキ岩というのがあります。大きな岩ですが。その岩のところに銅鐸が粉々に、全部そろっているそうですけ

ど、粉々にして埋めていたものもある。

佐野史郎さんの番組の３回目で、岡山県の楯築というところをやっています。これは総社市になりますが、これは弥生時代の終わりの墓です。直径が約50m、古墳でいうなら前方部、後方部、円が真ん中にありまして、両方に突出部があるのですけど、全部入れると約90mの大きさの墓なのです。弥生の墓といってもかなり大きなものです。そこへ行ってみますと、高さが約２～３mの大きな岩がある。お墓の主体部の周りに並んでいる。それで、楯築という。伝説がありまして、ウラと吉備津彦が戦ったところ、という伝説のあるところです。それを岡山大学が発掘しました。一番気にしたのは、そういう大きな岩が立っている。その立っているのは本当に弥生時代に建てたものかどうか、それを確認したい。ということで、私も参加しました。後でやったんじゃないか、それとも本当に弥生時代なのか、そこだけをなんとかしたいということで、岡山大学で当時、近藤義郎さんが一生懸命やりました。そういう状態ですから後になってからの信仰もありまして、ずっと今まで、最近も神社として奉られていたものですから、そこには平安時代のかわらけなどもたくさんある。基本的に弥生時代のもので良いだろうとなりました。そういうような墓に石をたてならべて囲い込むような大きな岩ですけども、人力で持って行った、運んで行ったに違いないんです。

それから、今度、島根県の出雲市に復元して博物館もできているのですが、四隅突出墳丘墓というのがある。これは広い範囲にあるのですけれども、そのうちの一番いい、大きなものがこの出雲市西谷にあります。その墳丘などはお墓の周りに石を張って囲い込んでいる。それは小さな石、大きくても人の頭くらい。小さいのはもっと小さい。それをずっと墓の周りに張っている。その延長線上に、前方後円墳を造った後に、お墓の周りに全部石で囲む。そういうやり方をしている。葺石をやる。

それともう一つ、私も島根県だけのやり方なのかわからないのですが、今言った西谷墳丘墓のところで、お墓の一番真ん中にこのくらいの直径15cmから20cmくらいの、大きさはいろいろあるのですけども、真っ赤に塗った石をお墓に上に置いている。あれはなんだろう。一か所や二か所ではない。島根県のその時期のお墓の上には赤い玉がある。まん丸の石、真っ赤に塗ったのを置いてある。大国主命、大黒様が江戸時代の掛け軸をみると赤い玉を持っている。あれはなんだろう。それもよくわからない。そういう気になるものがあります。

そして、古墳時代になりますと、後でスライドを見てもらいますが、祭祀遺跡というのは、つまりお祭りの遺跡というものは、石に関係するものがたくさん出てくる。全国にいろいろあるのですが、とくに有名なのが宗像の沖ノ島などにある。沖ノ島の岩というのは大きなものはこの部屋を逆に立てたくらいの大きさのものがごろごろしています。今でも男性しか行くことができない。島に渡った時、素っ裸になって海の中に入ってそれからじゃないと、島に揚げてもらえないです。そこには４世紀ごろからのお祭りの跡がたくさんあります。岩を対象にしていると思われるものです。この中に、石神的なものがあったり、磐座的なものがあります。磐境は後で壊してしまうので、ほとんど残っていません。

ただ、古墳時代で気にしてもらいたいのは、奈良県あたりを中心に考えてもらえば良いのですけれども、畿内周辺のお墓っていうのは、大きなお墓ですと500mからある訳ですね。世界で一番大きいものがあるのです。そういうお墓も全部土だけではなくて、石を張ります。石を積んだような墓です。ただ山を丸く盛るのではなくて、段を造りますので、上は平らです。そういう葺石が墳丘を全部覆っている。そして、中は石室を造る。古い時は竪穴式石室、少し新しくなってくると横穴式石室という。いずれにしても石で造った部屋がある。そして、石の棺を造る。弥生時代にも石の棺もありますけども、それは組み合わせて造っていくやり方。これが古墳時代になりますと石を刳り抜いた棺箱を造る訳です。場合によると九州の宇土半島から畿内まで運んできたりする。それを復元実験しようとして、何回か沈みそうになったと言っていました。当時それをやっている。最後に持って行き損なったというか、なんで中止したのかわからないけれども、兵庫県には生石神社の石宝殿という神社がある。あれは立っている。横にして切って、蓋と身を造れるような材料になる石ですけども、そういうのもある。石の棺箱です。その中には石の枕を置いてあります。石の枕を入れて、まくらのくらは磐座のくらと同じで、座席というような意味ですけど、ただ、そこに頭を置く関係でまくらと言っていたと思うのですけど、石の枕は古墳時

代にはかなりある。

さらに、一緒に埋めたものの中には、石で造った模造品がある。石で造った模造品というのは、今回持ってきていませんが、弥生時代には沖縄の方の貝で、腕輪を作ったりしている。男でも、女でも、子供たちでも貝の腕輪をやっている。それも、右腕にぎっしりつけている。一つや二つやっているだけではない。手が動かない状態でやっているのですけど、手が動かなくても食べさせてくれる人がいるぐらいやっているということなんです。それを古墳時代になると石で造って、ゴボウラ縦割りの貝輪を真似して造ったのが鍬形石とか、あるいは女性用のイモガイを横切りにしたものが、石で造って石釧と言っている。子供用はオオツタノハを腕輪にするのですが、オオツタノハを石で造ったのが車輪石と言われている。そういうものを石で造ってそれを棺の中に入れている。そういう事をやっている。それは石に対する考え方の一つだと思います。

結局、石の信仰はどういうことか。民俗学などを引用しなければいけなのですが、これは石と言うのは動かないもの、変化しないものの象徴として石を置いている。これは変わらないものであり、永遠なものであり、動かないものという信仰である。だから岩をいろいろと使うとか、あるいはその岩に対して信仰しているということがある。もう一つには石は日本の信仰の中に生きているということがあります。そして、石は大きくなる、増える。汗をかいたり、血を流したりする石もある訳で。そういうような片方では絶対動かないものだからとして信仰していながら、もう片方では動くことを考えている。大きくなったりすることを考えています。

最後に埋納経、お経を埋納する。この世は終わりという思想です。日本では仏教で、つまりお釈迦様入滅後何年、正法・像法・末法というようにしてだんだん変わっている。変わってきて末法がいよいよ日本の平安時代のいつ頃だということになる。いよいよこの世は終わりだ。そうすると何にも無くなる。もちろん人間もいなくなるし、すべて失われる。この世界は終わりだ。そうした時に、そうなったらどうなるか。その56億７千万年後の時に弥勒がぽっと出てくる。何にもない世界から、弥勒がぽっと出てくる。それが弥勒下生だと言うのです。その時に何もないものですから、その時にお経をとっておかなればならない。お経を埋める訳です。それをどこに埋めればよいのか、それは岩石のがっちりしているようなところ、そういうところとかに埋めておく。筒に入れたり、甕に入れたりしてお経をとっておく。そうでなければ石に文字を書いて、そして、埋めておく。だいたいは神社の境内が多いです。お寺の境内もあるのですけど、神社の境内が一番多い。そこが一番残るだろうと言い方をして、そして、岩のところにやっておくのがあります。さっき、山梨県の石のところから石棒が出た。石棒が立てかけるようにその岩の下に出てきている。それと同じように、経筒が岩の下に隠すように、埋めてあった例が、那智の滝の傍で掘っていたら、そういうのが出てきました。石で囲ったり、石に書いたりしているのです。

それから子持ち勾玉なんですが、古墳時代のもので特殊なもの。勾玉が子を産むという考え方。だいたい５世紀だと思ってもらえばよい。古墳時代のその頃に流行って、日本列島にちゃんとしたものだけでも400～500はある。何に使ったのかはわからないのですが、祭祀遺跡からこの子持ち勾玉がその中心的になって出てきます。江戸時代には、石剣頭と、昔の刀の柄頭じゃないかと言って、木内石亭のような人たちが言ったもんですから、結構偽物もたくさんあります。朝鮮半島にも９個ぐらいある。これは勾玉が子を増やすという信仰がその表れだと言われています。ほぼそれは間違いないだろうと言われています。それから先はどうだかわからない。それはこの間、佐野史郎さんのときに言ったんですけど、それはもしかすると蚕の増産を願っているのか、それとも農作物、米を代表とするようなものの増産を願っているのか、あるいは自分たちの子孫、子供たちがたくさんできるように願っているのか、それはわからないけども、いずれにしても、玉が玉を産むというような考え方にあることは確かであります。

【スライド割愛】

最後に紹介しました長野県の児玉石神事は増えることが良いこととしています。江戸時代から記録があることですから、年々石が増えていっていることがわかります。実はこういった信仰が他にもあるのですが、ちゃんと伝えてやっている神社に松代の玉依姫神社が典型であります。これは石が増える、玉が増えるそういう信仰の一つだということです。民俗の中には、どこかにお参りに行って、草鞋の鼻緒のところに小さな石がくっ付いてき

て、邪魔だから捨てる。捨ててもいつの間に、またくっ付いていて、仕方がないから、持って帰ってきて、祭っておいたら大きな石になった。そういう信仰は民俗の方ではあるのです。その他、石が動いて何々したというのが伝承の中にはいくつかある。

こういう風なものが日本の石信仰の中にそれぞれありまして、基本的には先ほど言いましたように石は動かない盤石なもの、変化しないものだという言い方と、もう一つは逆に石は生きているという言い方があって、石は大きく育つ、増えるという信仰がある。そういう事が日本の石信仰の中にはあると言って良いと思う。あのパワーをくれるというが最近の言い方でして、そういう事があるのかもしれませんけれども、しかし日本人の石に対する信仰というものはちょっと変わったものと言えます。ただし、これは日本だけの信仰かと、実は中国の孫悟空の話は石猿ですし、中国に旅行した人は登封というところに啓母石という大きな石、やはり磐座だとは思います。それは伝承を持ったもので、漢代から祭りの対象になった岩ですし、四川省に行きますと、禹が生まれた岩という、岩から人が生まれるという変な信仰ですけれども、中国でもそれはある。中国の泰山にもある。必ずしも日本だけの話ではないかもしれません。しかし、日本人はとくに石にこだわっていることは事実だと思います。

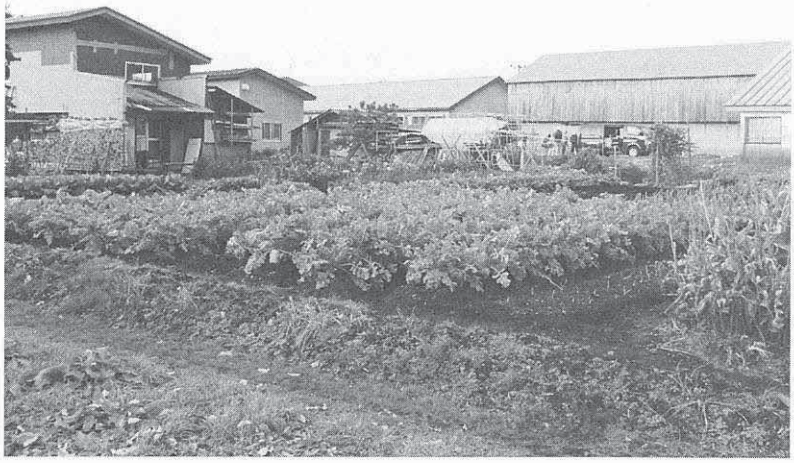
今後、伊勢堂岱遺跡とか、七日市の石倉岱遺跡が周りと比較されながら研究されていきますと、当時の人たちがどういう風に考えていたかという事を、少しずついろんな例を比較しながら研究し、そういう人たちがどう考えていたかを想像するだけなのかもしれませんけれども、できるだけ確かなものにしていきながら、これから研究していかなければならないと思います。まだまだわかっていないことはたくさんありますので、どうか皆さんも知恵を出して、皆で考えていくと良いと思います。

まとまりませんで、少しオーバーしてしまいましたけど、これで終わります。ありがとうございました。

【質問１】伊勢堂岱遺跡のボランティアグループの一人です。円環思想について、先生のお考えをお聞きしたいのです。なぜ、サークルなのかという解釈です。

【椙山】まだ解釈までちゃんとしていないかもしれません。縄文時代には確かに円ということを考えています。それはものによってはわりかし四角っぽいのもあります。そう言って良いのかわかりませんが、古墳時代でもお墓かなんか造るときに、自然に造ると丸か、四角です。三角にはほとんどしません。ですから、普通に考えて人間が形づくるとするならば、丸か、四角になるんだろうと思う。それだけでは、確かに円に対する考え方はどうだという答えになりませんので、これはたとえば円については、茶道の茶がけの円だけ書くというようなこともありますけれども、あれほど円に対する事を考えているのかというとそれは難しいだろうと思います。けれども、縄文人は縄文人なりに一つの完結した姿っていうものを円だと考えているだろうと思います。古墳時代になりますと、円いからこれが円かというと、実は装飾古墳などのこれは蛇の目だったりしますので、これは蛇の目玉を考えている。いわゆる蛇の目傘とか、蛇の目文様、茶碗の底の蛇の目高台とか、それと同じような蛇の目を考えているものがある。それで、円は円でも、なかなか難しいところがあります。場合によると鏡を表しているのではないかということもあります。逆に鏡が、中国の鏡か、日本の鏡もそうですけれども、鏡というのは四角鏡もあったり、ハート形、猪の目のハート形のようなものもあったりするのですけど、やはり全時代を通じて、一番多いのは円なんです。それは円に対するやはり中国人の考え方も、円を良しとしている。縄文人も何か円に関する想いを持っていたんだろうと思います。思いますけども、まだ私も本当に良い考えは、彼らが持っていた考えがどういう考えなのかまだ少しわからない事があります。

図版 1

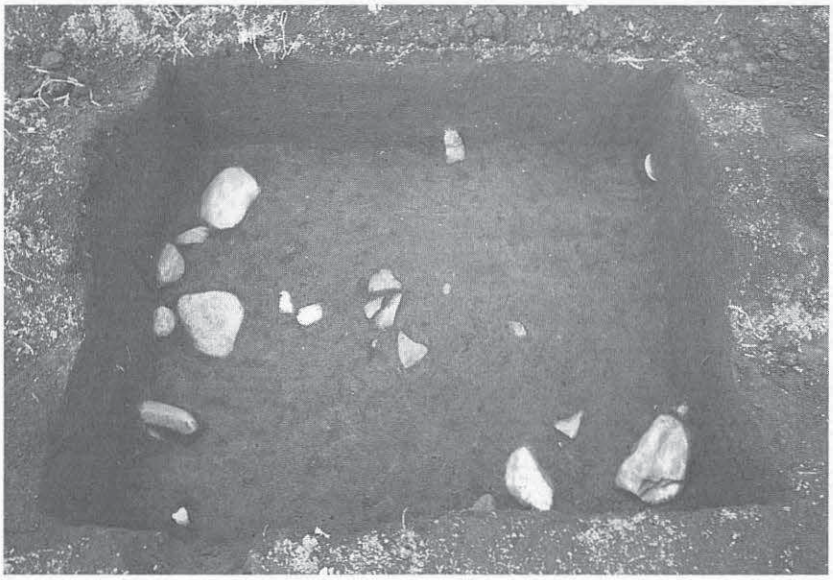


調査地近景

調査区４

ボーリング探査

図版２

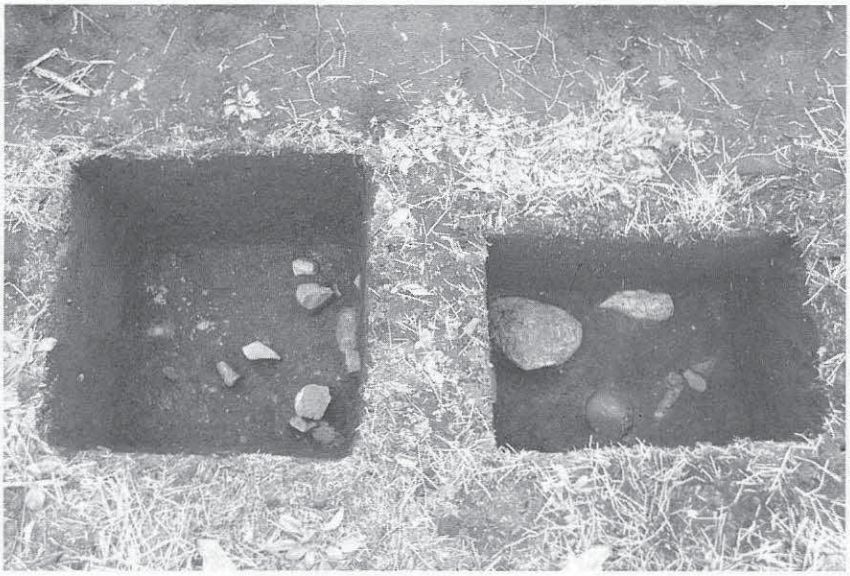


TP２配石確認状況

TP２遺物出土状況

TP２ピット確認状況

図版３

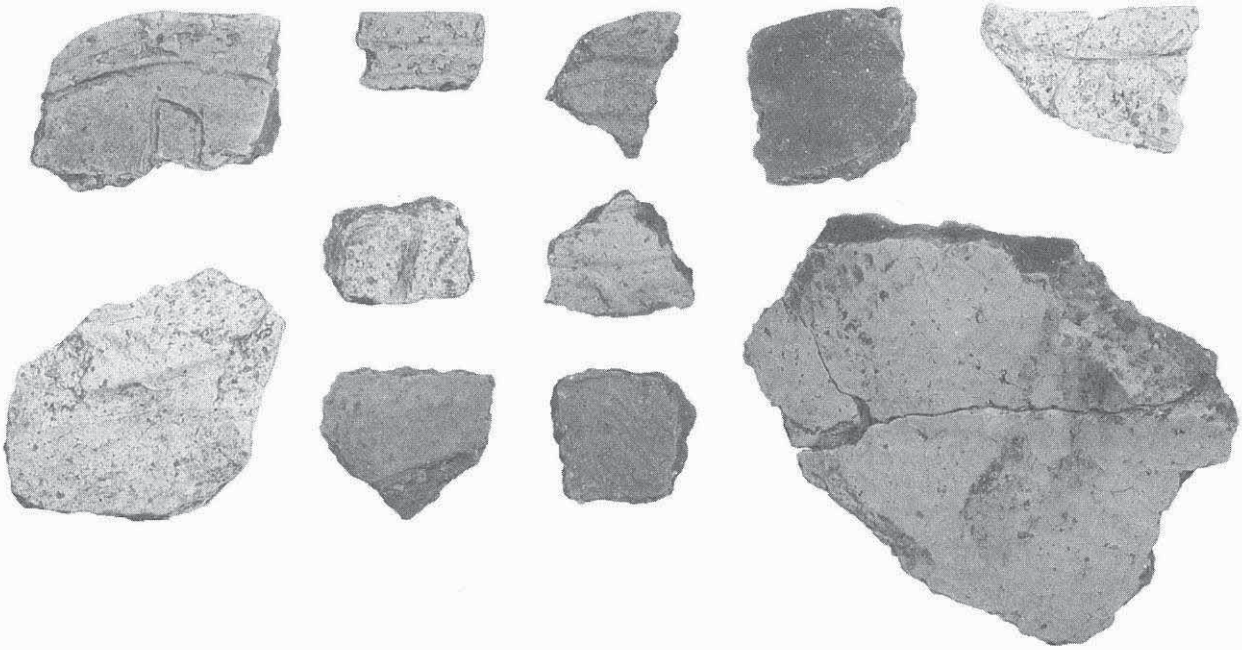


TP１・３確認状況

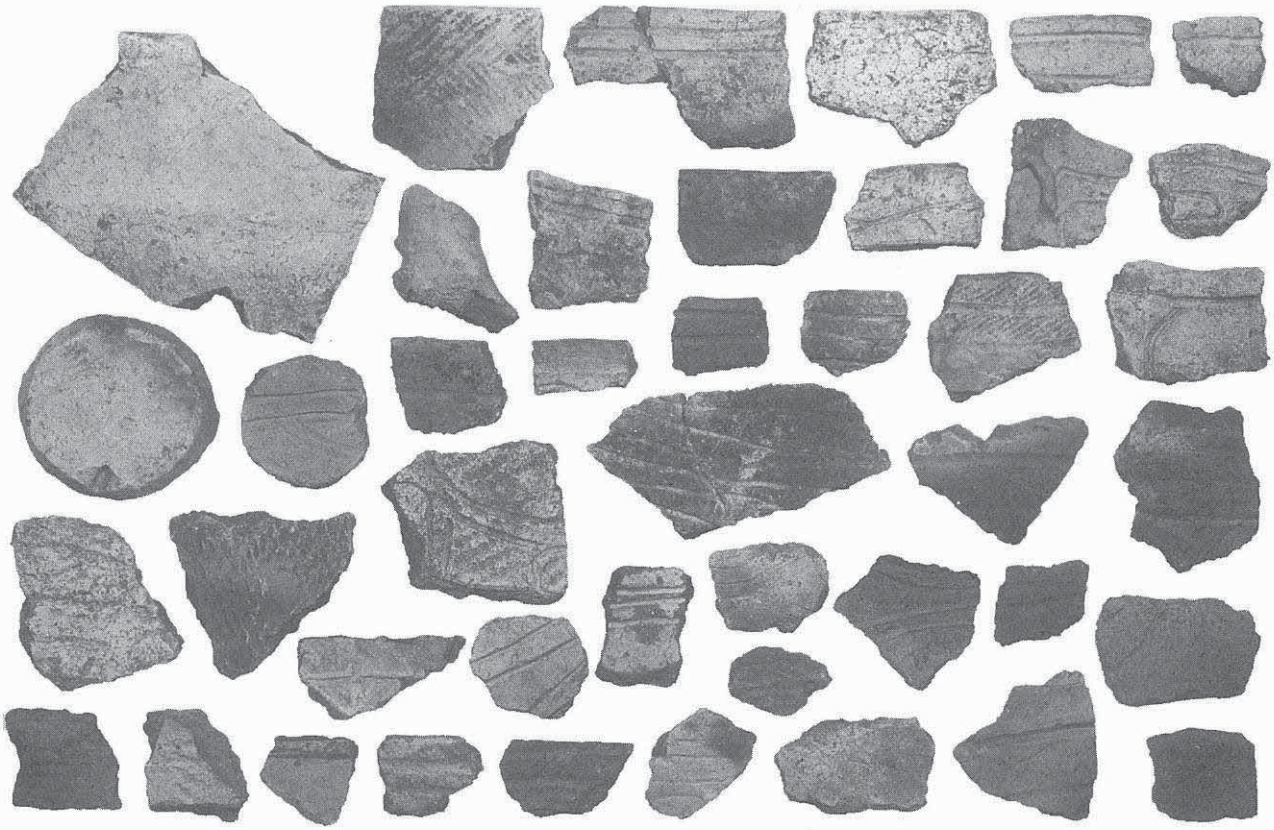
TP３確認状況

TP１完掘状況

図版４



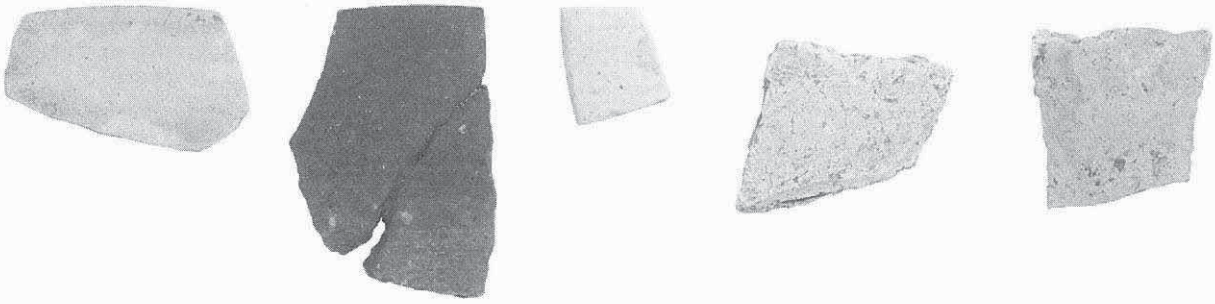
試掘出土縄文土器



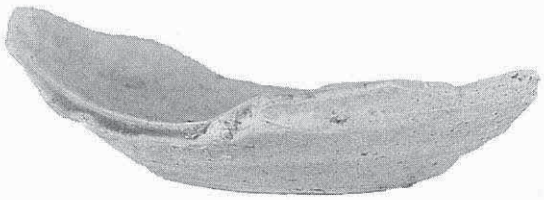
2010年表採縄文土器

図版５

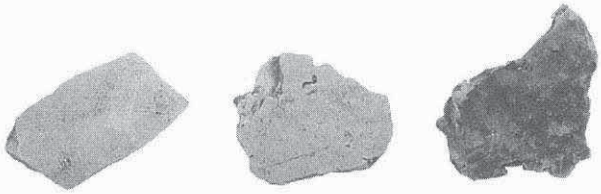
2010年表採及び佐藤家所蔵土器



TP１出土土器



TP２出土土器

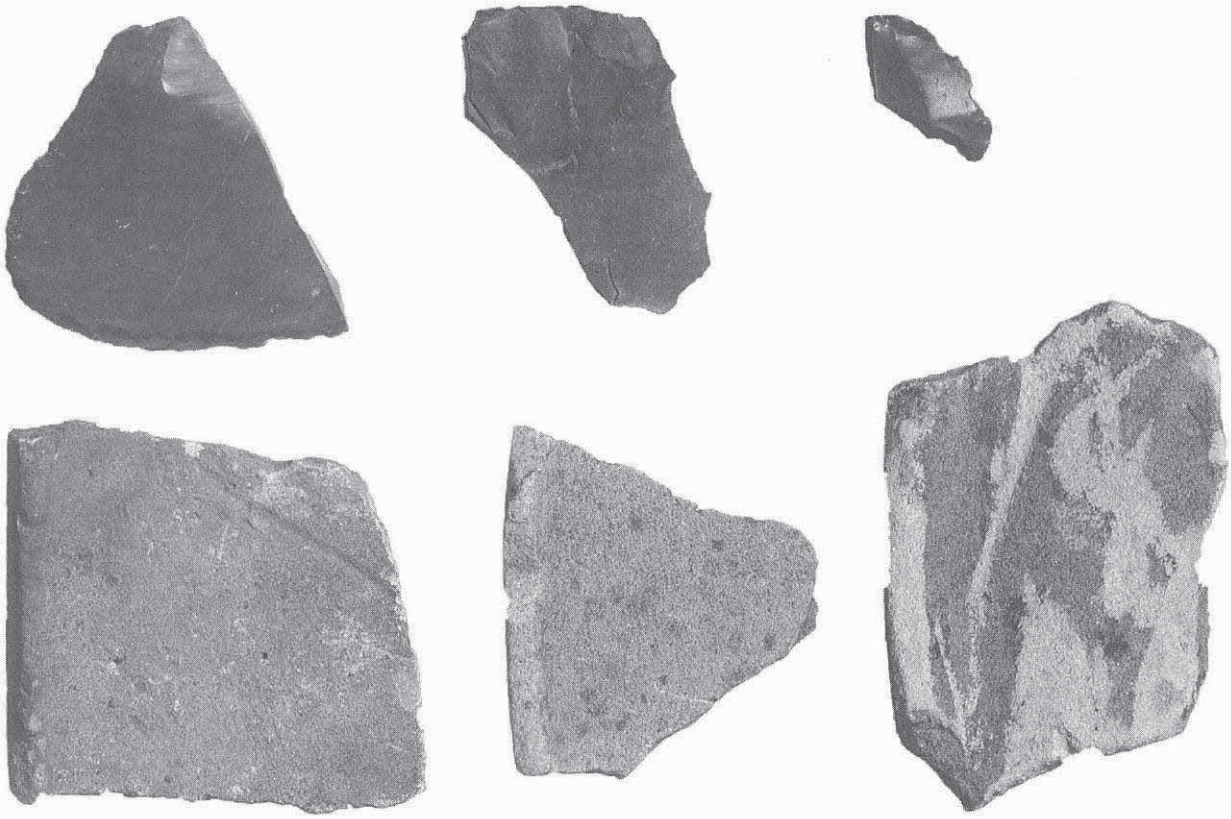


TP３出土土器

図版６

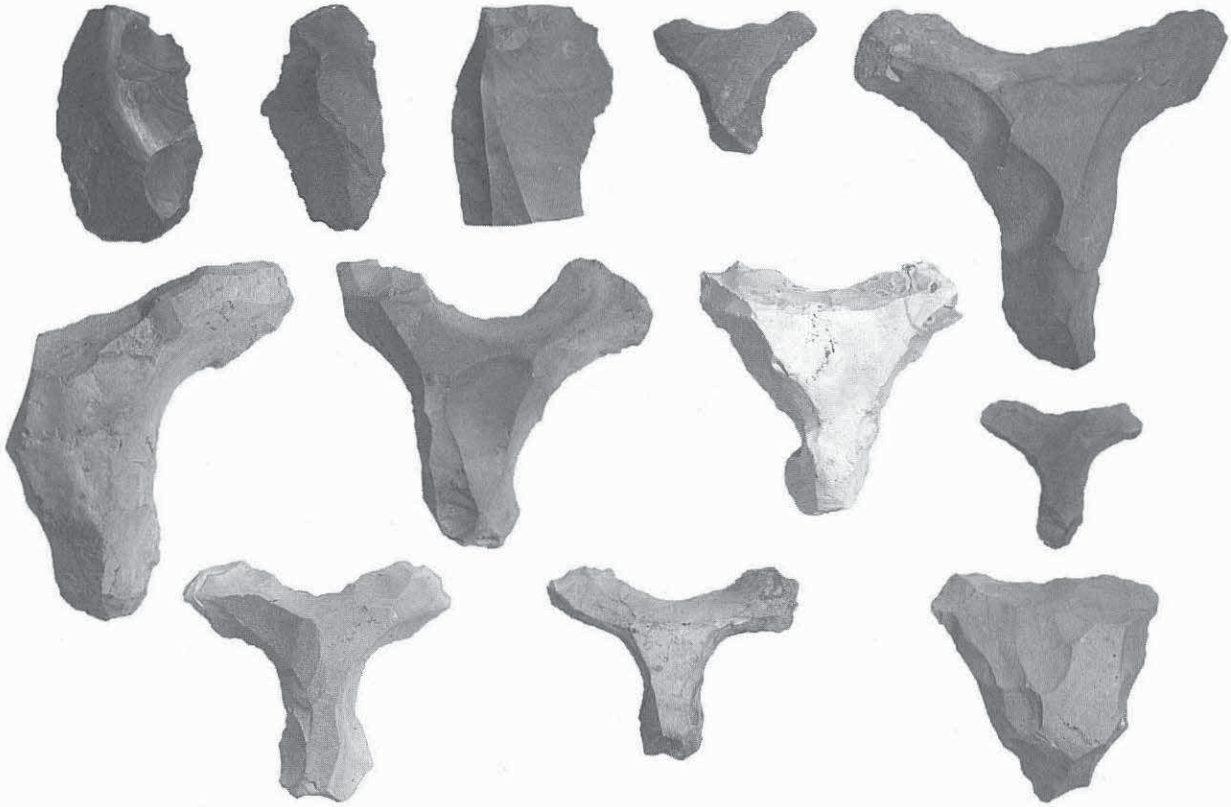
TP２出土石器

1985年出土石器・石製品



2009年表採石器

図版７



佐藤家所蔵石器・石製品

2010年表採石器・石製品

図版８

2010年表採石器

2010年表採石材（柱状節理）